上峰町文化財調査報告書第23集

船石南遺跡III

平成11年度佐賀県営かんがい排水事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003年3月

上峰町教育委員会

上峰町文化財調査報告書第23集

船石南遺跡III

ふないしみなみ

平成11年度佐賀県営かんがい排水事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003年3月

上峰町教育委員会

序

従来、上峰町は「遺跡の宝庫」と言われてきました。北部の脊振山系、その南麓から派生し南北に延びる洪積世丘陵と開析谷、さらに有明海へと続く沖積平野と変化に富んだ地形を含む町域には、いたるところに先人たちの暮らしの足跡が刻み込まれています。教育委員会では、こうした人々の暮らしの足跡、歴史的資産を保存活用し、将来へ継承していくために、開発と文化財の保護との調整に努めてまいりました。

上峰町では、町北部の大字堤地区を対象とした上峰北部県営農業基盤整備事業が昭和60年度より平成９年度まで実施され、これに伴う県営かんがい排水事業が平成11年度より開始されました。

この報告書は、県営かんがい排水事業に伴い平成11年度に実施した船石南遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書であります。同遺跡は、昭和60年度、62年度の農業基盤整備事業に伴い発掘調査を実施しましたが、弥生時代の集落跡や甕棺墓をはじめとする墳墓約600基が検出され、当時の集落と墓域のあり方を考える上で貴重な資料となっております。今回の発掘調査は、かんがい排水の導水管埋設工事に伴う限られた範囲の調査ではありましたが、昭和60年度の調査区に隣接する部分では、当時一部しか発掘できなかった住居跡等の遺構に連続する部分が検出され、これまで明かにできなかった遺構の全体像を把握できた遺構も多数あり、これまでの資料から得られた情報を補充する貴重な資料を得ることができました。

この報告書を学術資料として、また住民の共有の財産としての文化財を大切に保存していくための資料として役立てていただければ幸いです。

なお、今回の調査にあたって、ご指導、ご協力をいただきました文化庁、佐賀県教育委員会文化課、佐賀県農林部をはじめ、地元関係各位に対し深く感謝申し上げます。

平成15年３月

上峰町教育委員会

教育長　八　谷　日出夫

例　　言

1．本書は、平成11年度の佐賀県営かんがい排水事業に伴い、上峰町教育委員会が国庫補助事業として発掘調査を実施した、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字一本谷に所在する船石南遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書は、平成14年度佐賀県営農林業基盤整備事業等に係る埋蔵文化財発掘調査事業として、国庫補助事業により上峰町教育委員会が作成、刊行したものである。

3．発掘調査は、平成11年度の佐賀県営かんがい排水事業に伴う導水管路埋設工事の施工により地下の埋蔵文化財に影響が及ぶ部分について、便宜的な調査区域を設定し、上峰町教育委員会が実施した。

4．調査遺跡名・調査地区名・調査面積・調査期間は、以下のとおりである。

年　度	遺跡名	調査地区名	調査面積	調査期間
平成11年度	船石南遺跡	7区	200㎡	平成12年1月26日 ～ 平成12年2月4日

5．現場での遺構実測作業は、調査員の指示により、実測作業員が行った。

6．遺構の個別写真及び出土遺物の写真撮影は、調査員が行った。

7．調査後の出土遺物、記録類の整理作業は、上峰町文化財整理事務所にて実施した。

8．本書中の挿図・実測図作成、拓本、トレース作業などは、調査員の指示により、製図作業員が行った。

9．本書の執筆・編集は、原田大介が行った。

10．本報告書に係る発掘調査で出土した全ての遺物、及び図面・写真・その他の記録類は、上峰町教育委員会で保管している。

凡　　例

1．船石南遺跡の略号は、「FIM」であり、調査区略号は、「FIM-7」とした。

2．遺構番号は、遺構の種別を表す2文字のアルファベットに続き、調査区の番号に01、02などの2桁の番号を組み合わせて表記した。

SH……竪穴式住居址　SB……掘立柱建物址　SK……土壙　SD……溝跡・溝状遺構

SX……性格不明遺構・その他

例）SH701　7区の1号竪穴式住居址　　SK715　7区の15号土壙

3．本文・挿図中の方位については、全て座標北を基準としている。

4．表中の数値に付した記号について、（　）は推定値を、※は部分値・残存部値をそれぞれ表している。

5．土器実測図の縮尺は、原則として1/4であるが、土器拓影など、同一図版内で縮尺が異なるものについては、遺物報告番号の後に続けてその縮尺を特記している。

6．遺物実測図の遺物報告番号は、一連の番号を付した。また、この番号は、遺物写真図版に付した遺物報告番号と一致する。

調 査 組 織

調査事務局	総　　括	福　島　　毅	上峰町教育委員会	教育長職務代理者
			（平成11年４月１日～５月31日）	
		古　賀　一　守	〃	教育長
	事務主任	福　島　　毅	〃	教育課長
	経費執行	原　田　大　介	〃	文化係長
		樋　口　佳　子	〃	文化係
調査組織	調 査 員	原　田　大　介	上峰町教育委員会	文化係長
調査指導		佐賀県教育委員会		

発掘作業参加者

秋山　巌、秋山ユキエ、石橋テル、石丸ミチエ、江口照代、江越　晋、大石貞義、緒方ツタエ、北島光男、久仏衣江、最所和子、執行一水、執行ミハル、島　四郎、志波正千、高島　昇、高島蔦枝、田中ミスエ、田中　豊、鶴田　馨、鶴田キヨ子、鶴田竹次、鶴田末友、鶴田八重子、福島一雄、松尾キミエ、松尾トシエ、馬原喜美子、矢動丸五十三、矢動丸喜三、矢動丸信子、山田満穂、吉田英子、（発掘作業員）
岩下貴子、坂本恵子、島　美保子、田尻祐子（実測作業員）

整理作業参加者

島　美保子、田尻祐子（製図作業員）

目　　次

序

例言・凡例

調査組織・発掘作業参加者・整理作業参加者

Ⅰ．遺跡の位置と環境 …… 1

1．船石南遺跡の位置 …… 1

2．歴史的環境 …… 1

Ⅱ．調査に至る経緯 …… 7

1．調査に至る経緯 …… 7

2．調査の経過 …… 7

Ⅲ．調　査 …… 8

1．船石南遺跡と調査区の概要 …… 8

2．遺　構 …… 8

(1)　竪穴式住居址 …… 8

(2)　土壙 …… 15

(3)　甕棺墓 …… 15

3．遺　物 …… 18

4．まとめ …… 21

挿図目次

Fig. 1　上峰町北部地形概略図（1/10,000） …… 2

Fig. 2　船石南遺跡の位置及び周辺遺跡（1/50,000） …… 3

Fig. 3　船石南遺跡周辺地形図及び調査区位置図（1/2,500） …… 9

Fig. 4　船石南遺跡７区　遺構配置図（1/200） …… 10

Fig. 5　竪穴式住居址実測図（1）SH-701・SH-702（1/80） …… 12

Fig. 6　竪穴式住居址実測図（2）SH-703・SH-704・SH-717・SH-720（1/80） …… 13

Fig. 7　竪穴式住居址実測図（3）SH-721・SH-722・SH-723（1/80） …… 14

Fig. 8　土壙実測図SK-707・SK-712～SK-714・SK-716・SK-718・SK-719（1/60） …… 16

Fig. 9　甕棺墓実測図SJ-708・SJ-709・SJ-710・SJ-711（1/20） …… 17

Fig.10　出土遺物実測図（1）（1/4） …… 22

Fig.11　出土遺物実測図（2）（1/4） …… 23

Fig.12　出土遺物実測図（3）（1/4） …… 24

Fig.13　出土遺物実測図（4）（41～44　1/4・45、46　1/8） …… 25

表 目 次

Tab. 1　船石南遺跡７区　出土竪穴式住居址一覧表 ……15
Tab. 2　船石南遺跡７区　出土土壙一覧表 ……15
Tab. 3　船石南遺跡７区　出土甕棺墓一覧表 ……18
Tab. 4　船石南遺跡７区　出土石器・鉄器一覧表 ……21
報告書抄録

図 版 目 次

PL. 1　船石南遺跡７区　0 mp～30mp付近
PL. 2　船石南遺跡７区　30mp～50mp付近
PL. 3　遺構（1）SH-701・SH-702・SH-703
PL. 4　遺構（2）SH-704・SH-717・SH-720
PL. 5　遺構（3）SH-721/SJ-578・SH-722・SH-723
PL. 6　遺構（4）甕棺墓集中部分 0 mp～ 5 mp付近・SJ-708・SJ-709・SJ-710・SJ-711
PL. 7　遺構（5）SK-707・SK-712・SK-713・SK-716・SK-719出土
PL. 8　遺物（1）SH-701・SH-702・SH-704・SK-707・SK712・SH-717出土
PL. 9　遺物（2）SH-717出土
PL.10　遺物（3）SH-717出土
PL.11　遺物（4）石器・鉄器

Ⅰ．遺跡の位置と環境

1．船石南遺跡の位置（Fig. 1・2）

船石南遺跡が所在する佐賀県三養基郡上峰町は、佐賀県東部の穀倉地帯である佐賀平野のほぼ中央、三養基郡の西端に位置しており、東部は同郡中原町・北茂安町と、南部は同郡三根町と、西部は神埼郡東脊振村・三田川町と境を接している。また、この神埼郡との境界は、旧来の三根郡との郡界を踏襲しており、現在も町のほぼ中央を東西に横断する国道34号線付近の三田川町と接する地区は郡境と呼称されている。

鳥栖市から佐賀郡大和町に至る佐賀県東部には、北部に脊振山地、その南麓に発達する洪積世丘陵、さらに南部には有明海へと続く沖積平野が展開するという、変化に富んだ地形が発達している。なかでも、山麓部から沖積平野部へ移行する部分に発達する洪積世丘陵は、山麓部に源を発し有明海へと南流する大小の河川によって開析され北から南へ延びる舌状を呈した段丘を数多く形成している。そして、これらの段丘は古くから人々の生活の場として利用され、段丘上には数多くの遺跡が分布し、遺跡数、内容ともに県内でも有数の地域となっている。

そのようななか、南北に細長い町域をもつ上峰町においても、北部に山麓部、中央部に洪積世丘陵部、南部に沖積平野部と、この佐賀県東部の特徴的な地形が展開しており、とくに中央部に発達する洪積世丘陵地域を中心に遺跡の分布が知られ、古くから「遺跡の宝庫」と呼ばれてきた。

今回調査を行った船石南遺跡が所在する町北部の大字堤地区は、中央を北部の鎮西山山麓に源を発する切通川本流が小さく蛇行しながら南流し、これに幾条かの小河川が流入し支流を形成している。これら切通川本支流の開析作用によって形成された谷底平野を境界として、堤地区には大小の南北に延びる舌状丘陵が発達している。

平成11年度の県営かんがい排水事業に伴い調査を実施した船石南遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字一本谷、四本杉に所在し、切通川東岸の船石丘陵南端から南東に派生した標高14～17m付近の一支丘上に位置している。遺跡が立地する船石丘陵は、中原町高柳集落付近から派生し、本町船石集落を経て、JR長崎本線の南、切通集落の北で平野に没する低位の段丘で、東方の船石工業団地遺跡群が立地する丘陵とは切通川支流船石川によって、北西方の八藤遺跡が立地する八藤丘陵とは切通川支流の大谷川によって、西方の二塚山遺跡群が立地する二塚山丘陵とは切通川本流によってそれぞれ分かたれている。船石丘陵の本体には弥生時代の集落跡を中心とした船石遺跡が立地している。

2．歴史的環境（Fig. 2）

上峰町を中心に佐賀県東部の遺跡を概観すると、前述のとおり、山麓部から洪積世丘陵部におよぶ一帯が古くから人々の生活の舞台となっており、山麓部及び各段丘上には、現在、遺跡の存在が知られ、県内においてもとくに弥生時代遺跡を中心に遺跡の分布密度が高い地域となっている。沖積地を望む丘陵部のほとんどが、各時代の集落あるいは墓域として占有され、とりわけ、弥生時代以降の遺跡を縄文時代以前の遺跡と比較すると、量的にも、質的にも爆発的に増加、充実する。銅鐸の鋳型を出土した鳥栖市安永田遺跡[1]、約400基の甕棺墓が検出された中原町姫方遺跡[2]、埋納された12本の銅矛を出土した北茂安町検見谷遺跡[3]、甕棺墓から舶載鏡を出土した神埼郡東脊振村三津永田遺跡[4]、近年の工業団地建設に先立つ調査で貴重な遺構、遺物が検出された神埼郡の神埼・三田川・東脊振の２町１村にまたがる吉野ケ里遺跡[5]など多くの著名な集落遺跡、墳墓群が知られ弥生時代の「クニ」あるいは「ムラ」単位の集団の存在が想定されるに至っている。このようななか、南北約12km、東西約３kmと南北に細長い町域を持つ本町においても同様に、町の北部から中央部を占める洪積世段丘上に弥生

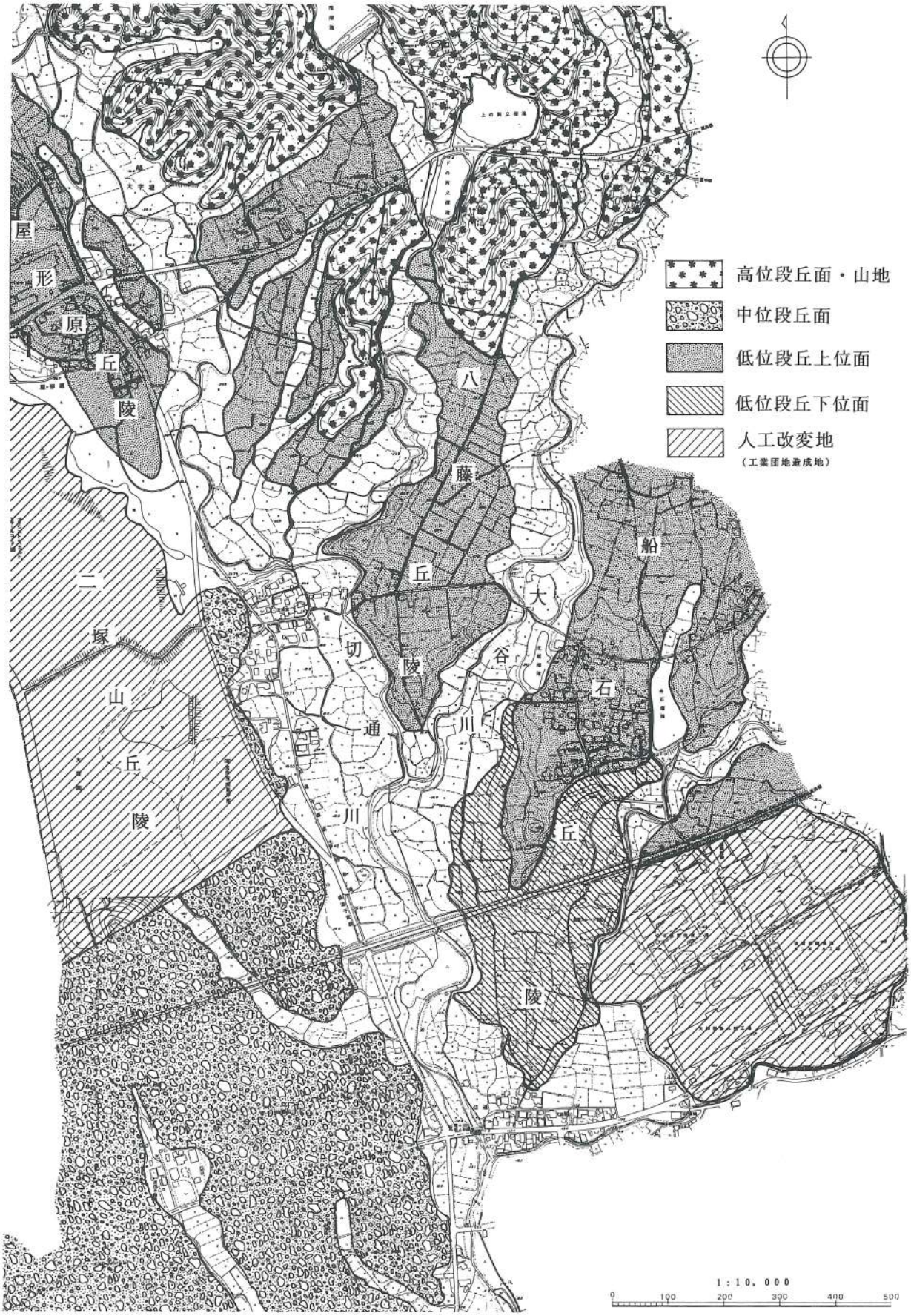


Fig. 1　上峰町北部地形概略図（1/10,000）

上峰町
1 奥の院古墳群
2 鎮西山山城
3 二本柳古墳群
4 鎮西山南麓古墳群
5 堤三本松遺跡
6 屋形原古墳群
7 谷渡古墳群
8 堤三本柳遺跡
9 青柳古墳群
10 新立古墳群
11 屋形原遺跡
12 堤六本谷遺跡
13 堤土塁跡
14 八藤遺跡
15 二塚山遺跡
16 五本谷遺跡
17 船石遺跡
18 船石南遺跡
19 切通遺跡
20 一本谷遺跡
21 坊所一本谷遺跡
22 上のびゅう塚古墳
23 目達原古墳群
24 坊所城跡
25 樫寺遺跡
26 杉寺遺跡
27 坊所二本松遺跡
28 坊所三本松遺跡
29 塔の塚廃寺跡
30 上米多貝塚
31 米多城跡
32 前牟田城跡
33 加茂環濠集落跡
34 江迎城跡
35 一ノ橋環濠集落跡
中原町
36 山田蔵骨器出土地
37 山田古墳群
38 大塚古墳
39 八幡社遺跡
40 簑原遺跡
41 姫方遺跡
42 姫方前方後円墳
43 姫方原遺跡
44 ドンドン落遺跡
45 町南遺跡
46 天神遺跡
47 西寒水遺跡
北茂安町
48 宝満谷遺跡
49 宝満宮前方後円墳
50 大塚古墳
51 東尾銅剣出土遺跡
三根町
52 本分貝塚
三田川町
53 吉野ヶ里丘陵遺跡群
54 下中杖遺跡
55 下藤貝塚
神埼町
56 志波屋六本松遺跡
57 伊勢塚前方後円墳
58 馬郡遺跡
東脊振村
59 西石動古墳群
60 戦場ヶ谷遺跡
61 三津永田遺跡
62 西石動遺跡
63 松原遺跡
64 辛上廃寺跡
65 横田遺跡

Fig. 2　船石南遺跡の位置及び周辺遺跡（1/50,000）

時代を中心に各時代の遺跡が分布している。

先土器時代の遺跡についてみると、各段丘ごとに層序が異なる本地域においては本格的な調査がなされていないのが現状で、断片的な遺物の出土、採取にとどまっている。町内では、平成4年度の県営農業基盤整備事業に伴う八藤遺跡の調査において細石刃1点とこの時期のものと考えられる石器類が少量出土しているが、これが発掘調査における主な出土例である[6]。周辺地域では、神埼郡三田川町との境界に位置する二塚山丘陵の三田川町側からナイフ形石器の採取例が報告されている[7]。また、平成5年度の県営農業基盤整備事業に伴う八藤遺跡下層における阿蘇4火砕流跡と埋没林に係る調査において、先土器時代の年代示標となっている姶良-Tn火山灰（AT）の含有ピークが、通常の丘陵上の埋蔵文化財調査において遺構検出面としている「地山」の表層を構成する黄褐色風積土層の最上部付近のアカホヤ含有層のやや下部にて検出されている[8]。

縄文時代になると、中原町香田遺跡[9]や東脊振村戦場ヶ谷遺跡[10]などが出現する。町内においても、これまでも町北部の丘陵部から土器や石器が、耕作や先覚者の遺跡の表面観察などによって断片的に出土、採取されていたが、この度の上峰北部農業基盤整備事業に伴う発掘調査の結果、平成元年度の船石遺跡11区[11]、平成2年度から5年度にわたり実施した八藤丘陵の調査[12]において、遺構や遺物がまとまって検出されており、今後の調査例の増加が期待されている。

弥生時代になると、遺跡の数や規模、その内容が飛躍的に増加、充実することは先に触れたが、早くから『魏志倭人伝』の「弥奴国」の所在地を佐賀平野東部、なかでも三養基郡西部の旧三根郡にあてる論考が行われてきたことは周知のことである。旧三根郡に所属する上峰町においても、丘陵部のほとんどにこの時期の遺跡が展開している。しかし、町の南部や中央部の米多地区、坊所地区の丘陵部は、中世以降集落として発達し、早くから宅地化が進み、本格的な発掘調査の例に乏しく、わずかに再開発に伴い部分的に小規模の発掘調査が行われているに過ぎず、遺跡の詳細について把握できていないのが現状である。これに対して、町北部の大字堤地区では、近年の工業団地建設や農業基盤整備事業など大型開発に伴い広範囲かつ大規模な発掘調査が実施され、各遺跡から当時の社会の様子を知るうえで貴重な資料が得られている。町内の代表的な遺跡としては、甕棺墓から細形銅剣や貝釧を出土した切通遺跡[13]、神埼郡東脊振村、三田川町にまたがる、佐賀県東部中核工業団地の建設に伴い甕棺墓、土壙墓など約300基が調査され、舶載鏡、小型仿製鏡をはじめとする貴重な副葬品を出土した二塚山遺跡[14]、佐賀県住宅供給公社の宅地造成に伴う調査で一集団の集落部分の全容が明らかになった一本谷遺跡[15]、地区運動公園整備に伴う調査で5世紀代の古墳とともに支石墓はじめ多数の甕棺墓が検出された船石遺跡[16]などが知られている。また、この度の県営農業基盤整備事業に伴う調査においても、船石遺跡[17]、船石南遺跡[18]、八藤遺跡[19]から住居址や甕棺墓などが多数検出されている。

古墳時代になると、この地域にも首長墓が出現する。初頭の時期には中原町姫方原遺跡[20]、上峰町五本谷遺跡[21]などにおいて方形周溝墓が営まれ、やがて中期にかけて鳥栖市から佐賀郡大和町に至る山麓や丘陵部に大型の前方後円墳が出現する。鳥栖市剣塚古墳[22]、中原町姫方古墳[23]、上峰町西南部から神埼郡三田川町にまたがる目達原古墳群[24]、神埼郡神埼町伊勢塚古墳[25]、佐賀市銚子塚古墳[26]、佐賀郡大和町船塚古墳[27]など佐賀県東部の代表的な古墳が築かれるようになる。さらに後期になると、現在長崎自動車道や県道佐賀川久保－鳥栖線が通る山麓部から丘陵部にまたがる一帯に小円墳を中心とした古墳が多数築かれ、それぞれが山麓部の尾根や谷あるいは丘陵を単位として後期古墳群を形成している。

後の『肥前風土記』にみえる三根郡綾部・米多郷に属する当時の上峰町一帯は、『古事記』、『国造本紀』などの記事によれば応神天皇の曾孫にあたる「都紀女加」なる人物が初代の米多国造として中央より下向した地域に

比定され、その中心は、町南西部の坊所・米多地区から神埼郡三田川町東部の目達原（めたばる）一帯にあったと推定されている。町内の主要な古墳としては、都紀女加を始祖とする米多国造一族の墳墓として、５世紀代後半に形成されたと考えられる上のびゅう塚（現在、陵墓参考地「都紀女加王墓」宮内庁管轄）はじめ無名塚、大塚、稲荷塚などの前方後円墳６基ほか古稲荷塚など円墳数基からなる目達原古墳群[28]が知られていたが、戦前の陸軍飛行場建設の際に、唯一上のびゅう塚を残し他の古墳は簡単な発掘調査後破壊されている。また町の北部の古墳としては、同じく５世紀代の古墳で、蛇行状鉄剣、蛇行状鉄矛を出土した船石天神宮境内の船石古墳１～３号墳[29]が知られている。古墳時代後期の古墳としては、町北部の鎮西山の周辺山麓部から高位段丘上にかけて、小円墳を主体とする谷渡、青柳、新立、奥の院、鎮西山南麓、屋形原などの古墳群が点在している。

一方、この時期の集落は、神埼郡三田川町下中杖遺跡[30]、同郡東脊振村下石動遺跡[31]などが知られているが、弥生時代集落に比べ、遺跡そのものの数も少なく、調査例も少なくいまだに実態が明らかになっていないのが現状である。町内の遺跡をみても、当時の政治的中心であったと考えられる町南部の坊所・米多地区周辺における本格的な発掘調査の例がなく、今後の大きな課題といえる。

奈良・平安時代遺跡としては、三田川町下中杖遺跡、東脊振村辛上廃寺跡[32]、霊仙寺跡[33]などが著名であるが、この時期の遺跡についてもまとまった調査例が少なく、実態はあまり解明されていない。当時の遺構として大規模なものは、佐賀平野に敷かれた条里制の遺構が上げられ、早くから地名などから条里の復元が試みられ、現在でははとんどの条里が復元されている。また、大宰府から肥前国府へ通じる官道の調査も進み、近年部分的な発掘調査が行われている。

町内では堤土塁跡[34]や塔の塚廃寺跡[35]などが奈良時代の遺跡として戦前から注目されている。町北部の堤地区の八藤丘陵と二塚山丘陵の間の谷底平野を遮断する形で築かれた堤土塁跡は、版築工法により築かれた福岡県の水城に似た施設＝「小水城」で、その築造目的が、大宰府の防衛施設であるとする説、灌漑用水確保のための溜池の堤防であるとする説など議論がなされてきたが、平成２年度からの土塁の東方に接する八藤丘陵の調査において、土塁東端から一直線に八藤丘陵を東方へ横断する道路側溝状の遺構が検出され[36]、その性格付けにあらたに古代道の存在が想定されることとなった。また町南西部を占める目達原丘陵の南端部に位置する塔の塚廃寺跡は、百済系単弁軒丸瓦が発見され、戦前までは基壇、礎石の存在が知られていた奈良時代中期の寺院址で、目達原古墳群を営んだ米多国造一族の流れをくむ三根郡の郡司層が建立したものと推定されている。また、町内における奈良・平安時代の集落は、農業基盤整備事業に伴う調査や近年の大規模小売店舗建設に先立つ坊所一本谷遺跡[37]の調査などでまとまった調査がなされたのみで、今後の調査例の増加が期待される。

中世になると、北部の山麓部の小峰に山城が築かれ、沖積平野部には環濠を伴う平城や集落が出現する。町内の中世城館址としては、北部の鎮西山山城、上峰町中央部の平野を臨む丘陵部に坊所城跡、町南部の平野部には米多城跡、前牟田城跡、江迎城跡、一の橋環濠集落、加茂環濠集落などが知られていた[38]。しかし、昭和40年代後半からの圃場整備事業によって、これら平野部の遺構は、原状がほとんど失われてしまった。そのようななかで、町の親水公園として整備された江迎城跡では13世紀後半代の龍泉窯系の青磁碗が建物跡ともに出土し、また、坊所城跡では16世紀後半代の青花がそれぞれ出土している[39]。

以上、上峰町を中心に佐賀県東部の遺跡を概観したが、まさにこの地域は遺跡の密度、その内容ともに高く、遺跡の宝庫と呼ぶにふさわしい地域といえる。

註

1）藤瀬禎博・石橋新次 『柚比遺跡群範囲確認調査第３年次概要報告書』 鳥栖市文化財調査報告書第30集 鳥栖市教育委員会 1980

2）木下 巧・天本洋一 『姫方遺跡』 佐賀県文化財調査報告書第30集 佐賀県教育委員会 1974

3）七田忠昭 『検見谷遺跡』 北茂安町文化財調査報告書第２集 北茂安町教育委員会 1986

4）金関丈夫・坪井清足・金関恕 「佐賀県三津永田遺跡」『日本農耕文化の生成』 日本考古学協会 1961

5）七田忠昭他 『吉野ヶ里』 佐賀県文化財調査報告書第113集 佐賀県教育委員会 1992

6）原田大介 『八藤遺跡Ⅲ』 上峰町文化財調査報告書第16集 上峰町教育委員会 1999

7）七田忠志 「原始」『上峰村史』 上峰村 1979

8）下山正一・西田民雄 「Ⅱ．佐賀県上峰町周辺の地形と地質」『佐賀平野の阿蘇４火砕流と埋没林』 上峰町文化財調査報告書第11集 上峰町教育委員会 1994

9）高瀬哲郎・堤安信・久保伸洋 「香田遺跡」『香田遺跡』 九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書２ 佐賀県文化財調査報告書第57集 佐賀県教育委員会 1981

10）七田忠志 「佐賀県戦場ケ谷遺跡」『史前学雑誌』 ６－２・４ 1934

11）原田大介 『船石遺跡Ⅴ』 上峰町文化財調査報告書第12集 上峰町教育委員会 1995

12）原田大介 『八藤遺跡Ⅱ・堤土塁跡Ⅱ』 上峰町文化財調査報告書第14集 上峰町教育委員会 1998
前出（6）

13）金関丈夫・金関恕・原口正三 「佐賀県切通遺跡」『日本農耕文化の生成』 日本考古学協会 1961

14）高島忠平・七田忠昭他 「二塚山遺跡」『二塚山』 佐賀県文化財調査報告書第46集 佐賀県教育委員会 1979

15）七田忠昭 『一本谷遺跡』 上峰村文化財調査報告書 上峰村教育委員会 1983

16）七田忠昭 『船石遺跡』 上峰村文化財調査報告書 上峰村教育委員会 1983

17）鶴田浩二・原田大介 『船石遺跡Ⅱ図録編』 上峰村文化財調査報告書第６集 上峰村教育委員会 1988
鶴田浩二・原田大介 『船石遺跡Ⅱ本文編』 上峰村文化財調査報告書第７集 上峰村教育委員会 1989

18）昭和60、62年度、上峰村教育委員会調査、整理中

19）原田大介 『八藤遺跡Ⅰ』 上峰町文化財調査報告書第13集 上峰町教育委員会 1997

20）木下巧他 『姫方原遺跡』 佐賀県文化財調査報告書第33集 佐賀県教育委員会 1976

21）木下 巧・七田忠昭 「五本谷遺跡」『二塚山』 佐賀県文化財調査報告書第46集 佐賀県教育委員会 1979

22）石橋新次 『剣塚前方後円墳』 鳥栖市文化財調査報告書第22集 鳥栖市教育委員会 1984

23）前出（2）

24）松尾禎作 「目達原古墳群調査報告」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』 第９輯 佐賀県教育委員会 1950

25）木下之治 「古代国家の形成」『佐賀県史』 佐賀県 1968

26）木下之治編 『銚子塚』 佐賀市教育委員会 1976

27）松尾禎作 『佐賀県考古大観』 祐徳博物館 1959

28）前出（24）

29）前出（16）

30）七田忠昭・高山久美子・西田和已 『下中杖遺跡』 佐賀県文化財調査報告書第54集 佐賀県教育委員会 1980

31）高瀬哲郎他 「下石動遺跡」『下石動遺跡』 九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（6） 佐賀県文化財調査報告書第86集 佐賀県教育委員会 1987

32）松尾禎作 「東脊振村辛上廃寺跡の調査」『佐賀県史債名勝天然記念物調査報告』 第５輯 佐賀県 1936

33）田平徳栄他 『雲仙寺跡』 東脊振村文化財調査報告書第４集 東脊振村教育委員会 1980

34）高島忠平・柾 一義 『堤土塁跡』 上峰村文化財調査報告書 上峰村教育委員会 1978

35）松尾禎作 「塔の塚廃寺址」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』 第７輯 佐賀県 1940

36）前出（12）
原田大介 『八藤遺跡Ⅲ』 上峰町文化財調査報告書第16集 上峰町教育委員会 1999

37）平成５、６年度、上峰町教育委員会調査、整理中

38）米倉二郎 「中世」『上峰村史』 上峰村 1979

39）原田大介 『坊所城跡』 上峰町文化財調査報告書第10集 上峰町教育委員会 1992

II．調査に至る経緯

1．調査に至る経緯

今回の発掘調査の契機となった県営かんがい排水事業中原西部線に関する事業計画に伴い埋蔵文化財の取り扱いについての協議を行ったのは、平成10年10月に開催された「平成11年度農業基盤整備事業に係る文化財の保護に関する第１回協議会」であった。その席上、県営かんがい排水事業中原西部線の工事概要および平成11年度事業として本町切通地区の国道34号線からJR長崎本線までの導水管路埋設工事計画が提示された。

事業対象区域は昭和60～62年度の大字堤地区を対象とした上峰北部農業基盤整備事業地区内で、事業計画は農業基盤整備事業に伴い昭和60年度に発掘調査を実施した船石南遺跡の調査区の北辺に隣接してほぼ東西に走る農道部分の地下約３mの深度に導水管を埋設していくというものであった。農業基盤整備事業当時、この農道部分にも遺跡の広がりは認められており、遺構については盛り土などを行い現状保存の措置を採った部分であった。このため、教育委員会は、埋蔵文化財包蔵地外への管路埋設法線変更を提案したが、導水管の延長、勾配などの制約で計画変更は難しいとの結論であった。

工事の実施による埋蔵文化財への影響は避けがたく、平成11年度事業として船石南遺跡を東西に横断する形で延長約70m弱、幅員約３mの約200m²について、事前の記録保存を目的とした埋蔵文化財発掘調査を実施することとなった。

2．調査の経過

平成11年度の県営かんがい排水事業に伴う発掘調査は、導水管路埋設工事により削平が予定される部分、延長約67m、幅約３mの約200m²について便宜的に船石南遺跡７区とし、実施した。調査は、工事の進捗にあわせ30mほどのスパンごとに、工事サイドによる表土掘削の後、遺構検出、遺構掘り下げ、写真撮影、遺構実測の作業を行い、調査が終了した部分から導水管を埋設していくという作業サイクルの中で実施した。

現地での作業は、平成12年１月26日から２月４日まで行った。以下簡略に調査経過を記す。

１月24日　調査員立会いのもと、30mポイント（導水管埋設センターライン上の調査区東端に設定した０mポイントからの距離。以下、「○○mp」と表記する。）付近から西へ75mp付近までのスパンについて、工事サイドの重機による遺構検出面までの土砂掘削作業が開始された。25日まで掘削作業続く。

１月26日　発掘作業員による遺構検出作業を開始。検出された遺構から逐次掘り下げ作業を行った。以後、掘下げが終了した遺構から写真撮影、実測作業を行い、31日までこのスパンでの作業を続けた。

１月28日　残りの０mpから30mpまでの表土掘削が行われ、２月１日よりこのスパンの作業に着手、２月４日、甕棺墓の実測作業を終了し、現場での作業を終了した。

その後、出土遺物、記録類を文化財整理事務所へ移し、３月８日、遺物の水洗い、実測図等記録類の簡単な整理などを同事務所にて実施し、作業を終了した。

Ⅲ．調　査

1．船石南遺跡と調査区の概要（Fig. 1、3、4・PL. 1、2）

船石南遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字一本谷、四本杉に位置し、切通川東岸の「船石丘陵」と呼称する洪積世段丘の先端部からさらに南東へ派生する支丘上（標高14～17m付近）に位置している。

船石南遺跡は、昭和60年度および62年度の県営農業基盤整備事業に伴い過去２年次にわたり発掘調査が実施され、弥生時代の集落跡とともに甕棺墓をはじめ石棺墓、土壙墓など500基を超える墳墓が検出されている。また、遺跡の東を南流する船石川の東方に位置する船石工業団地内においても工場の建設に伴い多数の甕棺墓が出土したといわれており、一帯に一大墓域を形成している。一方、船石丘陵本体上に広がる船石遺跡は、弥生時代の大規模集落遺跡として知られ、この地域の弥生時代の集落と墓域のあり方を考える上で、貴重な遺跡といえる。

船石南遺跡のうち、今回の埋蔵文化財発掘調査の対象となった区域は、大字堤字一本谷付近で、船石丘陵から派生する支丘の基部に当たり、農業基盤整備事業によって整備された幅４mの農道が、遺跡を東西に横断している。今回はこの区域を船石南遺跡７区として調査を実施した。

今回の調査は、約67m×３mと線的な調査区となったため、通常の面的なグリッドは設定せず、埋設される導水管路センターラインを軸にして、調査区の東端に設定した０mpから５mおきにポイントを設定し実施した。

調査区域の土層は、後世の耕作などによって各時代の遺物包含層は失われ、道路下の旧耕作土あるいは底土の直下が洪積世丘陵を構成するいわゆる地山であり、この面が遺構検出面となっている。

船石南遺跡の今回の調査では、弥生時代中期前半から後期に及ぶ竪穴式住居、土壙、甕棺墓などが検出された。

2．遺　構（Fig. 4～9・PL. 1～7・Tab. 1～3）

今回の船石南遺跡７区の調査で検出された遺構は、弥生時代中期前半から後期に及ぶ竪穴式住居址９軒、土壙７基、甕棺墓４基、その他ピットなどであった。しかし、調査区の幅３mという制約の中での調査であったため、土壙１基とピットを除くといずれの遺構についても完掘できなかった。

(1) 竪穴式住居址（Fig. 4～7・PL. 1～5・Tab. 1）

竪穴式住居址は、９軒が検出されたが、今回の調査区が昭和60年度の農業基盤整備事業に伴い船石南遺跡１区として発掘調査を実施した調査区の北辺に隣接していることから、昭和60年当時調査区北側境界付近で検出され一部しか調査できなかった住居址６軒について、今回連続する部分が検出され、住居全体の形態や規模を明らかにすることができた。SH-701（昭和60年度調査のSH-603。以下同じ。）、SH-702（SH-604）、SH-703（SH-660）、SH-721（SH-580）、SH-722（SH-654）、SH-717（SH-582）がその例である（本文、一覧表中の法量等は、両者をあわせた全体規模を記載した。）。また、住居址の時期についてみると、SH-701、SH-721、SH-723の円形住居址は弥生時代中期前半の、SH-703、SH-717はベッド状遺構をもち後期の所産であると考えられる。

SH-701（Fig. 5・PL. 3）

SH-701は、35mp付近で住居址の北半部が検出された竪穴式住居址で、昭和60年度調査のFIM-１区のSH-602に連続する住居址である。長径5.7m、短径5.4mの円形住居址で、主柱穴は６本、中央に炉状土壙をもつ。

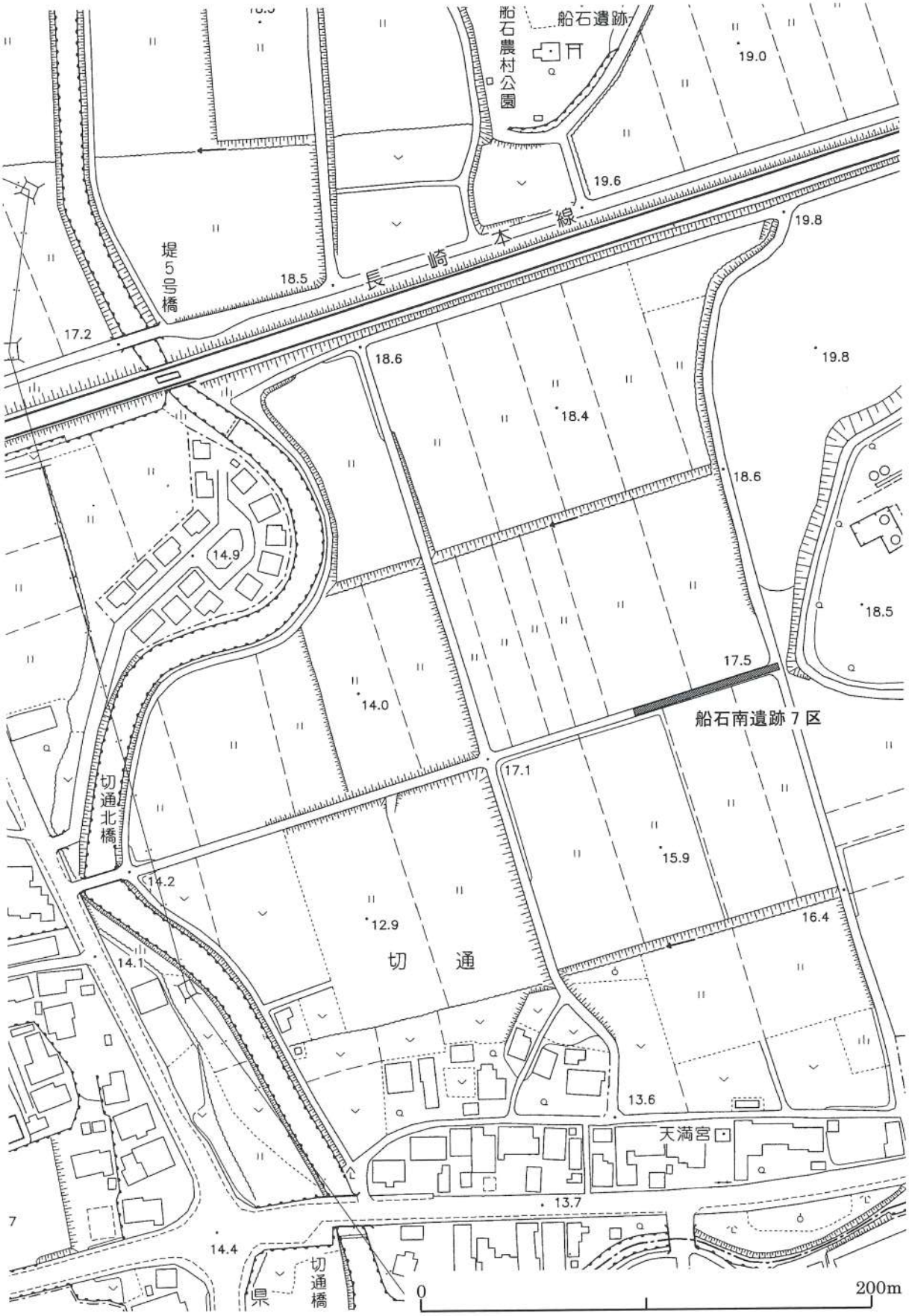


Fig. 3　船石南遺跡周辺地形図及び調査区位置図（1/2,500）

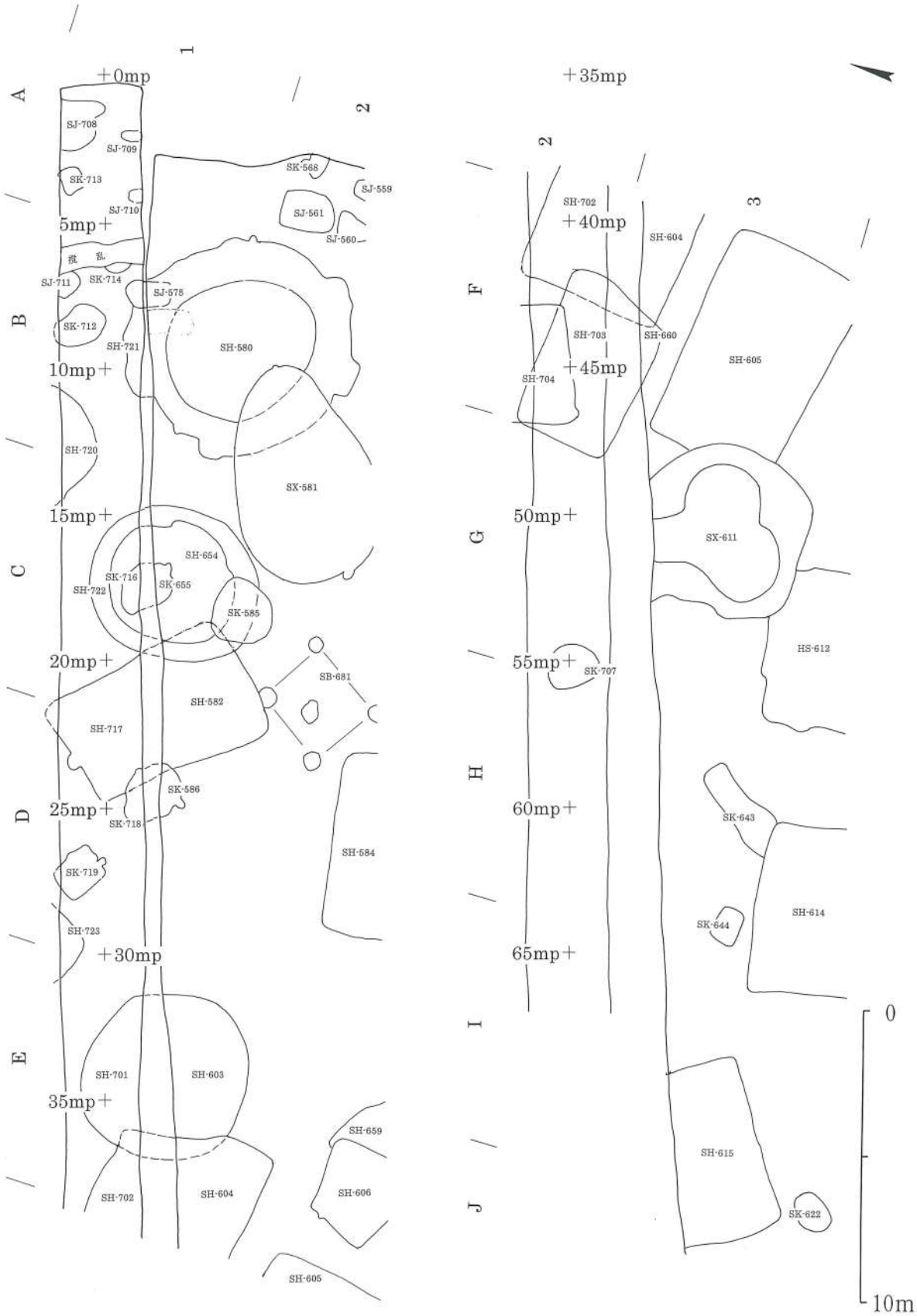


Fig. 4　船石南遺跡7区　遺構配置図（1/200）

床面積は、23.2㎡。床面までの掘り込みの深さは20cm強。

SH-702（Fig. 5 ・PL. 3）

SH-702は、40mp付近で住居址の北半部が検出された竪穴式住居址で、昭和60年度調査のFIM-1区のSH-604に連続する住居址である。長辺6.4m、短辺5.2mのやや不整な方形住居址で、主柱穴は不明。西壁沿いに幅1.3m、高さ5cm程度の長方形のベッド状遺構をもつ。床面積は、30.9㎡。床面までの掘り込みの深さは15cm程度。主軸は、N－83°－W。

SH-703（Fig. 6 ・PL. 3）

SH-703は、45mp付近で住居址の北半部が検出された竪穴式住居址で、昭和60年度調査のFIM-1区のSH-660に連続する住居址である。長辺5.8m、短辺3.8mの不整な方形住居址で、主柱穴は不明。住居南西隅の西壁に沿って幅1m、長さ1.8m、高さ10cm弱ほどのベッド状遺構をもつ。床面積は、17.8㎡。床面までの掘り込みの深さは15cm強。主軸は、N－88°－W。

SH-704（Fig. 6 ・PL. 4）

SH-704は、45mp付近で住居址の南部が検出された竪穴式住居址で、方形住居址と考えられ、東西の規模については一辺4.2mの南壁が検出されているが、南北長については調査区内で2m程が検出されたのみで不明である。主柱穴も不明。床面積は、検出された部分で4.9㎡。床面までの掘り込みの深さは25cm。主軸は、南壁を基準とすると、N－67°－E。

SH-717（Fig. 6 ・PL. 4）

SH-717は、20mp～25mp付近で住居址の北部が検出された竪穴式住居址で、昭和60年度調査のFIM-1区のSH-582に連続する住居址である。長辺6.2m。短辺4.3mのやや不整な方形住居址で、主柱穴は不明。FIM-1区側の床面中央に炉跡と考えられる掘り込みをもち、住居の北西及び南東壁際にそれぞれ幅1.2m、高さ5～10cmのベッド状遺構をもつ。床面積は、24.5㎡。床面までの掘り込みの深さは25cm。主軸は、N－39°－W。

SH-720（Fig. 6 ・PL. 5）

SH-720は、10mp～15mp付近で、調査区の北境界沿いに円弧状に検出された遺構で、円形あるいは隅丸方形の竪穴式住居址の一部と考えられる。全体規模、柱穴も不明。床面積は、検出された部分で2.5㎡。床面までの掘り込みの深さは20cm。

SH-721（Fig. 7 ・PL. 4）

SH-721は、10mp付近で、調査区の南境界沿いに円弧状に検出された遺構で、昭和60年度調査のFIM-1区の遺構配置図と照合した結果、SH-580に連続する住居址の一部であることが判明した。長径7.7m、短径7.0mの円形住居址で、住居内側に幅30～40cmの周溝がめぐり、さらにその内側に幅40～60cm、高さ30cm程の凸堤が周堤状に直径6m程の円形にめぐっている。この周堤帯は東の一部を約1.5m欠いており、おそらくここに入口が設けられていたものと考えられる。周堤帯内側に沿って9本の柱穴をち、これが主柱穴と推定される。床面中央には炉状土壙をもつ。床面積は、46.5㎡。床面までの掘り込みの深さは40cm。

SH-722（Fig. 7 ・PL. 5）

SH-722は、15mp～20mp付近で、調査区の南側に幅60cm、深さ10cm程度の溝が半円弧状に検出された遺構で、昭和60年度調査のFIM-1区の遺構配置図と照合した結果、SH-654に連続する当時住居址として取り扱った遺構の一部であることが判明した。長径推定5.9m、短径5.3mのやや楕円形住居址で、主柱穴などは不明。昭和60年度調査のFIM-1区で検出された周溝状遺構かとも考えられる。

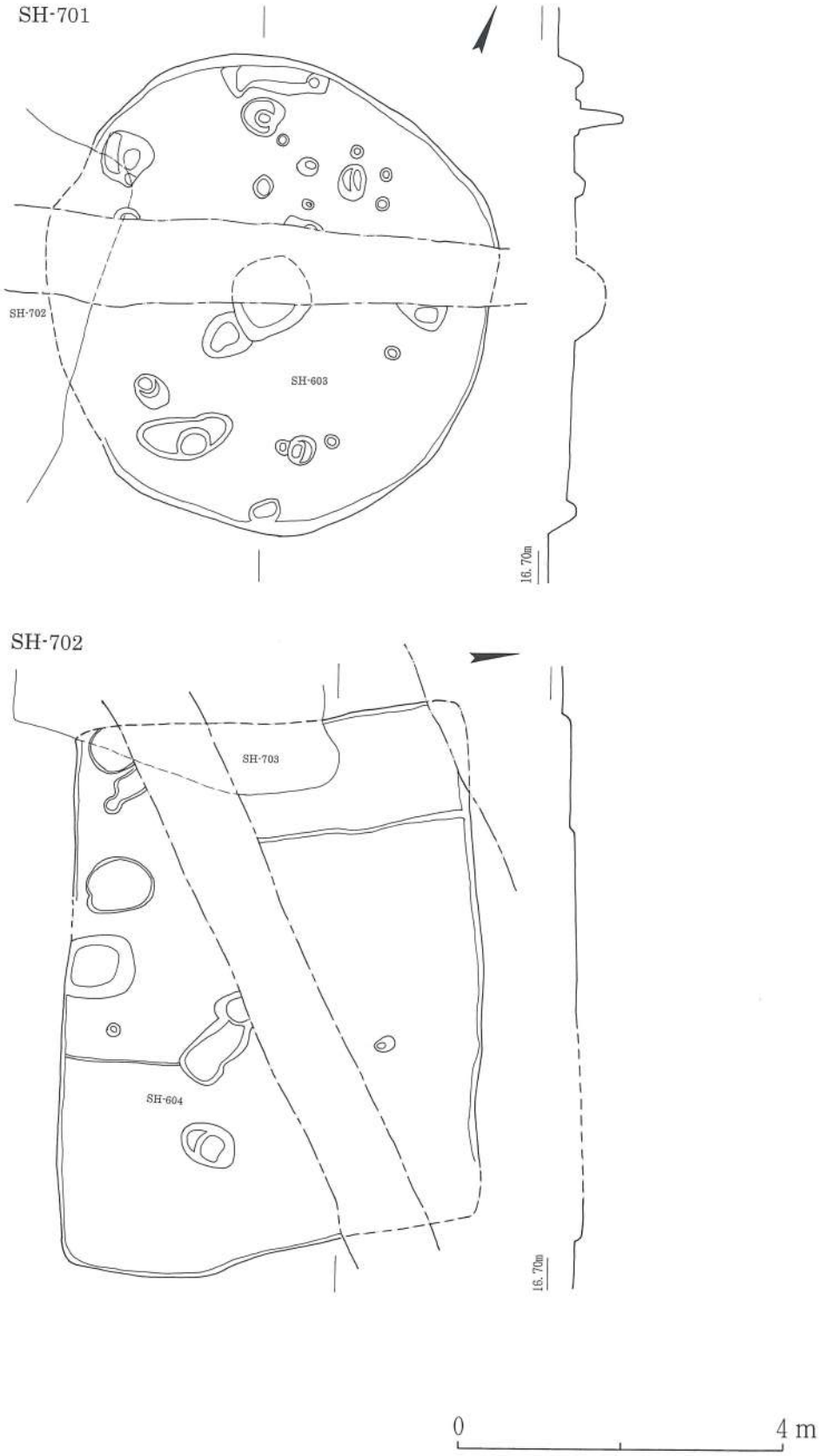


Fig. 5　竪穴式住居址実測図（1）SH-701・SH-702（1/80）

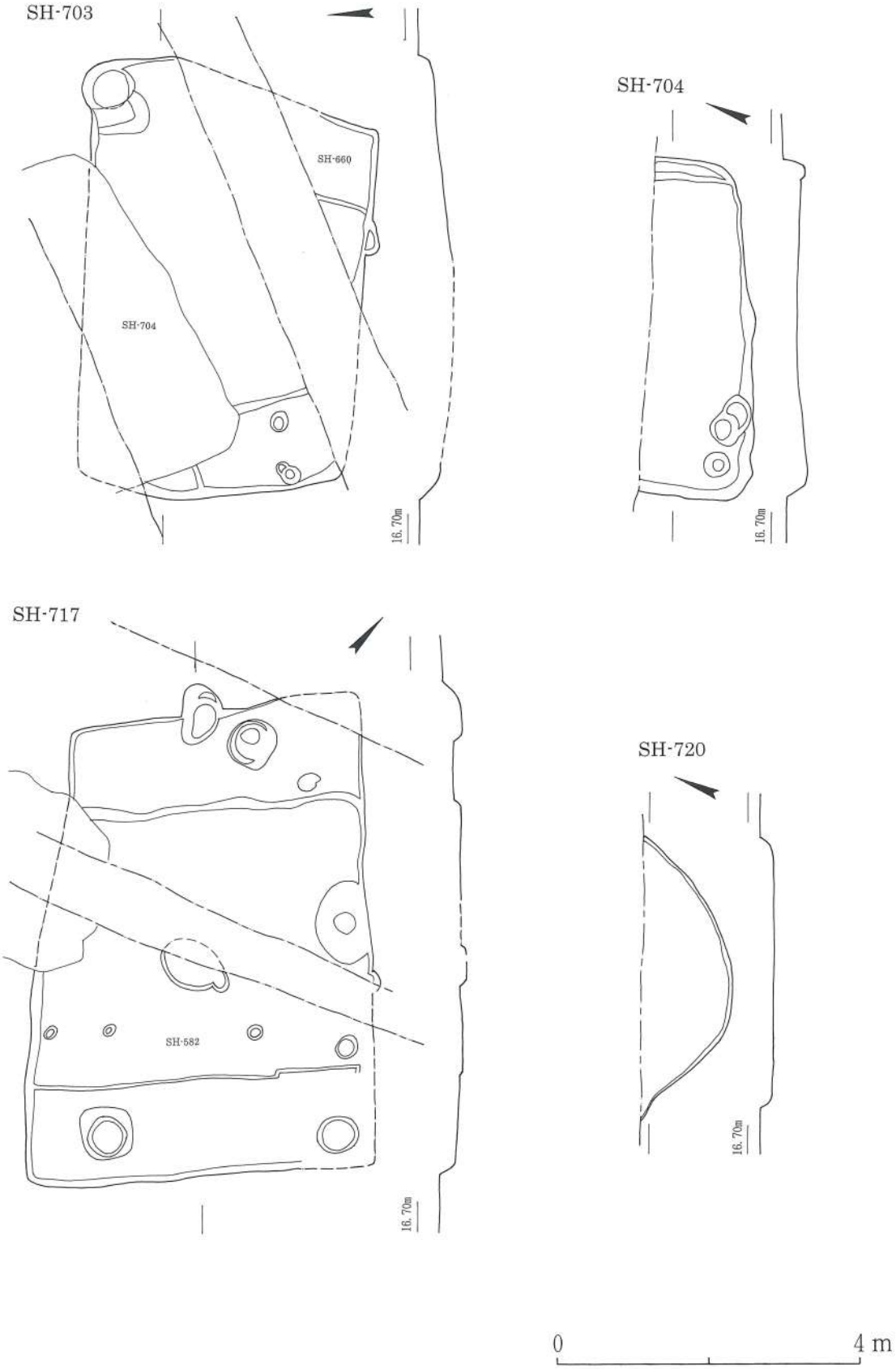


Fig. 6　竪穴式住居址実測図（2）SH-703・SH-704・SH-717・SH-720（1/80）

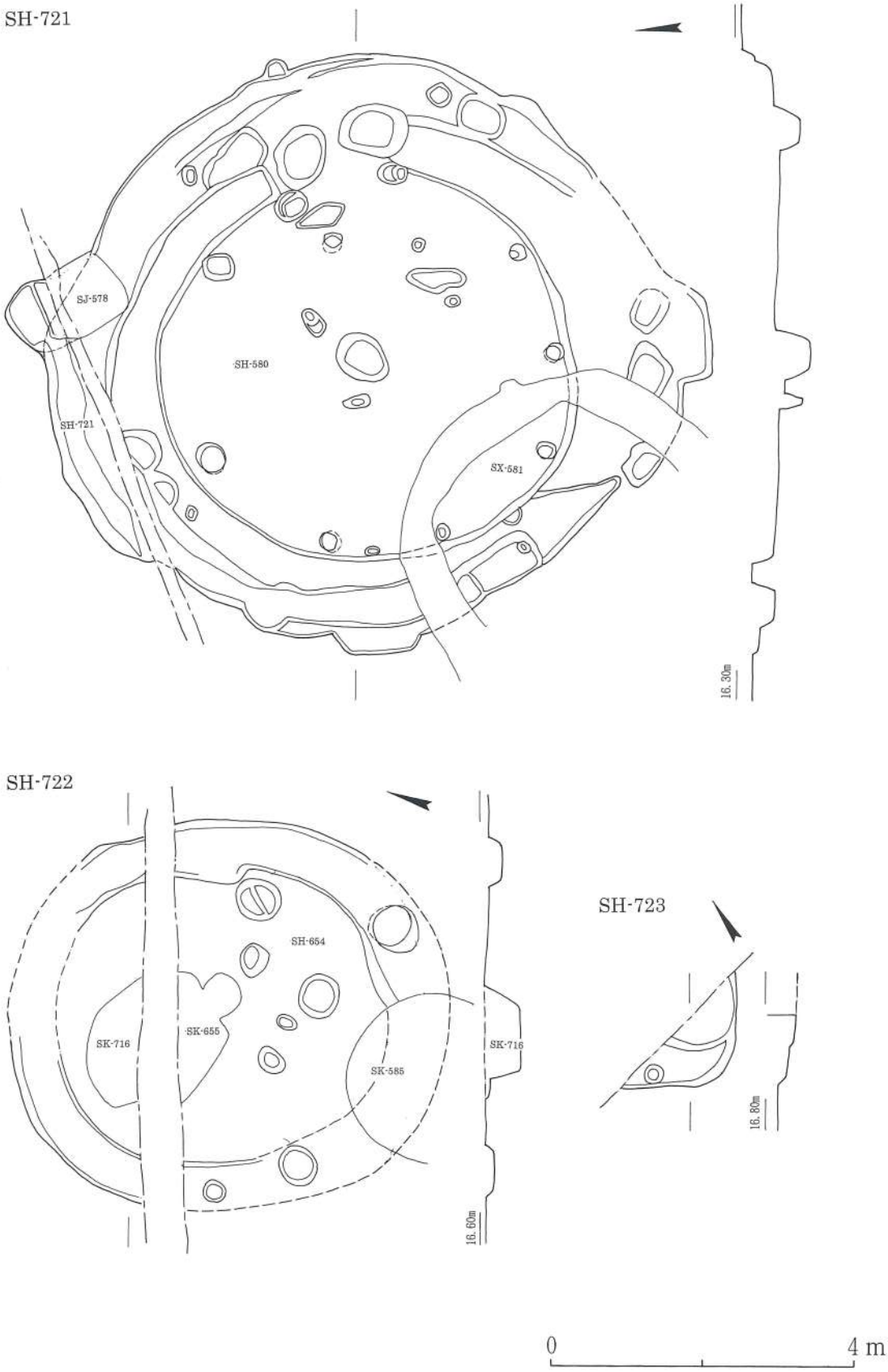


Fig. 7　竪穴式住居址実測図（3）SH-721・SH-722・SH-723（1/80）

SH-723（Fig. 7・PL. 5）

SH-723は、30mp付近で、調査区の北側に一部が検出された遺構で、隅丸方形の住居址の一部ではないかと考えられる。

Tab. 1　船石南遺跡７区　出土竪穴式住居址一覧表

住居址番号	平面形態	規模（m・m²）				棟方向	屋内施設				出土遺物	備考
		長辺	短辺	深さ	床面積		主柱穴	溝	炉・焼土など	その他		
SH-701	円形	5.7	5.4	0.23	23.2		6本		炉状土壙		弥生式土器蓋	SH-702に切られる。
SH-702	不整方形	6.4	5.2	0.15	30.9	N−83°−W				ベッド	弥生式土器鉢、手捏ね	SH-703に切られる。
SH-703	不整方形	5.8	3.8	0.15	17.8	N−88°−W				ベッド	弥生式土器甕、鉢、器台	SH-704に切られる。
SH-704	不整方形	4.2	※1.9	0.25	※4.9	N−67°−E		一部			弥生式土器甕、鉢、器台 土師器坏	
SH-717	不整方形	6.2	4.3	0.15	24.5	N−39°−W			炉状土壙	ベッド	弥生式土器甕、壷、器台 石包丁	
SH-720	方形？			0.20	※1.9							
SH-721	円形	7.7	7.0	0.15	46.5		9本	全周	炉状土壙	周堤		
SH-722	楕円形	(5.9)	5.3	0.05	22.6							周溝状遺構？
SH-723	不整方形			0.20	※0.8							

⑵　**土壙**（Fig. 8・PL. 5、7・Tab. 2）

今回の調査で土壙として取り扱った貯蔵穴などの遺構は７基であった。この中で、出土遺物などから時期が特定できる土壙は、弥生時代中期のSK-712、SK-713、SK-716がある。以下、各土壙について形態、法量などを一覧表にまとめて報告に代える。

Tab. 2　船石南遺跡７区　出土土壙一覧表

遺構番号	平面形態	規模（上段：上面、下段：底面、単位：m・m²）				柱穴状のピットなど	出土遺物	備考
		長さ・長径	幅・短径	深さ	底面積			
SK-707	不整円形	1.70 0.70	1.40 0.70	0.36	0.4		弥生式土器甕	
SK-712	不整円形	(1.8) (1.5)	1.30 0.74	0.48	1.5		弥生式土器甕、円筒型土器	一部が袋状に広がる。
SK-713	不整形	0.86 0.56	0.58 0.37	0.16	0.2		弥生式土器甕、鉢、壺	
SK-714	円形？	※0.9 ※0.7		0.19	※0.1			
SK-716	不整円形	2.32 1.50	1.60 1.04	0.45	(1.3)		弥生式土器甕	FIM-1の SK-655
SK-718	不整形	2.62 2.56	2.34 1.70	0.57	(3.7)			FIM-1の SK-586
SK-719	方形	1.64 1.48	1.38 1.20	0.30	(1.7)			

⑶　**甕棺墓**（Fig. 9・PL. 6・Tab. 3）

今回の調査では４基の甕棺墓が検出された。いずれも調査区東部の７mp付近までと限られた範囲で検出されたが、後世の耕作などによる削平を受けており遺存状態は極めて悪い。また調査区の制約により完掘できたものもなく、調査区北側で棺体の一部が検出されたSJ-708とSJ-711については、棺体の大部分が北側の調査区外に位置していることから、工事による掘削の影響が及ばないことを確認し、調査後埋め戻し保存した。甕棺墓の時

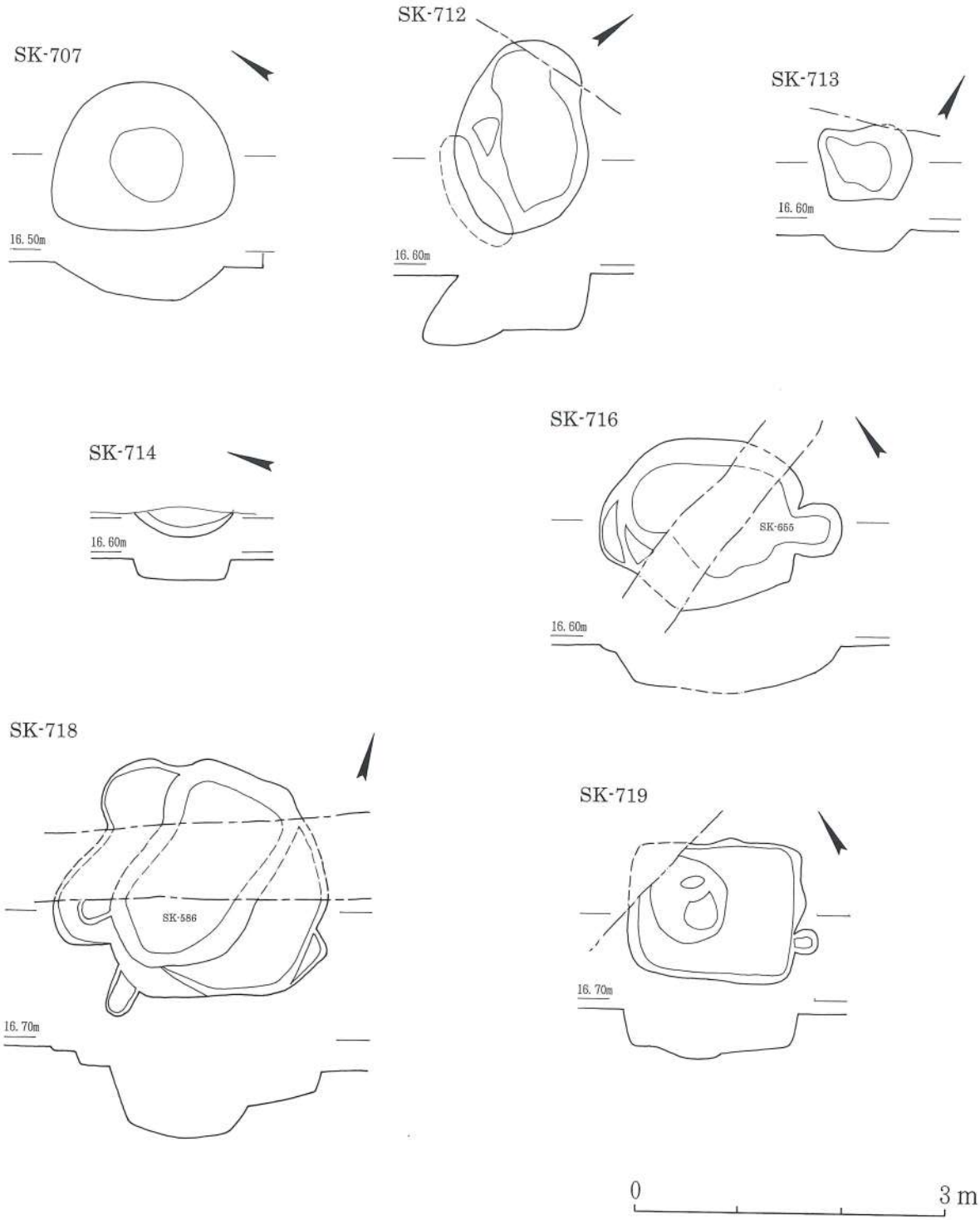


Fig. 8　土壙実測図SK-707・SK-712～SK-714・SK-716・SK-718・SK-719 (1/60)

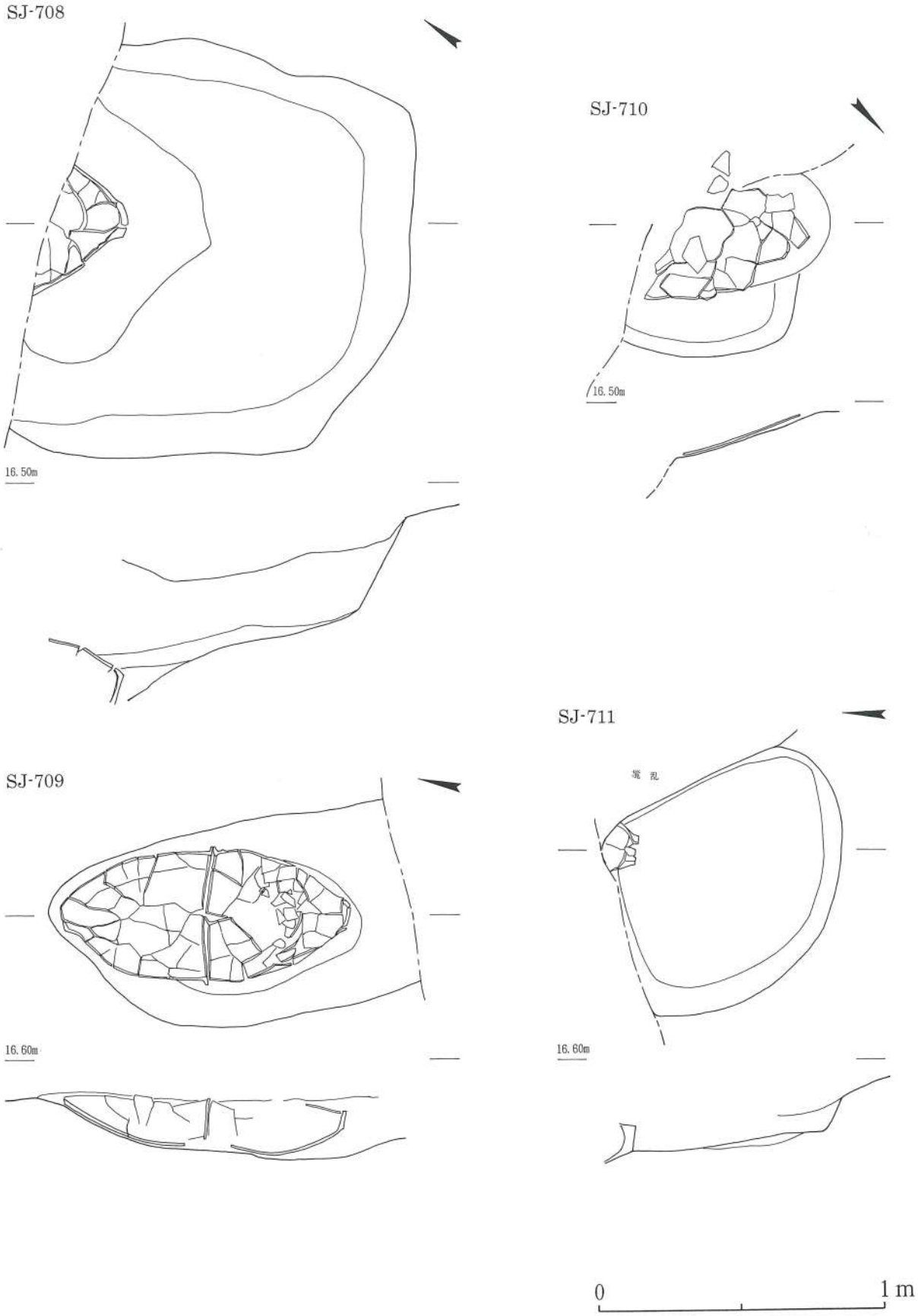


Fig. 9　甕棺墓実測図SJ-708・SJ-709・SJ-710・SJ-711（1/20）

期については、いずれも中期前半の所産になるものと考えられる。

SJ-708（Fig. 9 ・PL. 6）

SJ-708は、調査区東端の北側調査区界で検出され、上甕の一部が確認された成人棺。棺体の上部は後世の削平を受け、幅1.45m、深さ30～50cmの方形の一次墓壙が長さ1.5mほど検出された。検出された底部が上甕のもので原位置を保っているとすれば、甕棺の傾斜は－15°、主軸はN－146°－Eである。

SJ-709（Fig. 9 ・PL. 5 、 6）

SJ-709は、 2 mp付近の調査区南側で検出された接口式の小児棺。棺体の上部は後世の削平を受け、幅0.7m、深さ20cm程の二次墓壙と考えられる墓壙が長さ1.3mほど検出された。北側の甕を上甕とすれば、甕棺の傾斜は7°、主軸は、N－14°－Wを計る。

SJ-710（Fig. 9 ・PL. 6）

SJ-710は、 4 mp付近の調査区南側で検出された成人棺。棺体のほとんどは失われ、傾きから上甕と思われる甕の胴部が一部遺存していた。遺存部外面に凸帯は見られず、傾斜、主軸ともに不明。

SJ-711（Fig. 9 ・PL. 6）

SJ-711は、 7 mp付近の調査区北側で底部のみが検出された。底部の大きさから成人棺と思われる。先年の圃場整備で埋設された暗渠によって棺体及び墓壙が破壊され、扇形に残る一次墓壙と考えられる墓壙の一部が確認された。扇形の要部分で検出された底部が上甕のものとすると、甕棺の傾斜は－ 3 °、主軸は、N－177°－Eを計る。

Tab. 3　船石南遺跡７区　出土甕棺墓一覧表

甕棺墓番号	甕棺形式	組合せ器種（上・下）	成人・小児用の別	墓壙規模（m）上段：一次墓壙 下段：二次墓壙			方位（上甕基準）	傾斜	備考
				長さ	幅	深さ			
SK-708	——	甕・？	成人用	※1.5 ——	1.45 ——	0.5 ——	N－146°－E	－15°	調査後埋め戻し
SK-709	接口式	甕・甕	小児用	—— ※1.3	—— 0.70	—— 0.20	N－14°－W	7°	
SK-710	——	甕・－	成人用	——	——	——	不明	不明	上甕胴部破片が一部遺存
SK-711	——	甕・？	成人用？	—— ——	—— ——	0.10 ——	N－177°－E	－ 3 °	調査後埋め戻し

3．遺　物（Fig.10～13・PL. 8 ～11）

今回の調査で各遺構から出土した遺物は、一部の近世以降の遺物を除くと、ほとんどが弥生時代の土器、石器などであった。ここでは、出土した遺物のうち土器類については代表的なものを遺構ごとに報告し、その他の石器・鉄器類は、器種ごとに報告したい。

SH-701出土土器（Fig.10・PL. 8）

1は、弥生式土器の広口壺などの蓋。丸みを帯びた浅い天井部をもち、口縁部がやや外反し肥厚する。全体の1/4弱が遺存しているが、遺存部に身と蓋を固定するために紐を通したと思われる直径３mm程の小孔が、口縁から内側に1.2cmのところに２ヶ所、2.5cmの間隔で焼成前に穿孔されている。内外面ともにナデ。

SH-702出土土器（Fig.10・PL.8）

2、3は、弥生式土器。2は小型の手捏ね成形の土器で内外面ともにナデ。3は平底の碗。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部が外にやや肥厚する。内面口縁付近にハケ目を残すほかは内外面ともにナデ。

SH-703出土土器（Fig.10）

4～9は、弥生式土器。4は、丸底の鉢で体部は球形に近く、内湾しながら立ち上がり口縁に至る。内面ハケ目、外面粗いナデ。5～7、9は甕。6内外面にハケ、7は口縁にヘラ状工具の先端を連続押圧した刻み目、9は胴部内面にハケ目をもつ。8は器台の脚部、厚手で裾部内外面ともにハケ目。

SH-704出土土器（Fig.10・PL.8）

10～14は、弥生式土器。10は頸部が「く」の字形にくびれ、口縁が短く開く甕。11、12は、広口壺の口縁部。11は口縁が外反しながら開く。12は口縁は外反しながらやや開く。13は器台の受部、厚手で内面ナデ、外面はハケ目の後ナデ。14は碗。内面ハケ目の後ナデ、外面ナデ。15は、土師器坏。平底で体部は開きながら立ち上がり口縁がやや外反する。外面にロクロ目を明瞭に残す。

SK-707出土土器（Fig.10・PL.8）

16は、弥生式土器。やや内傾する逆「L」字形口縁の甕で口縁端がやや垂れ下がる。胴部上位に張りをもち、底部はやや上底を呈す。内面ナデ、外面ハケ目。

SK-712出土土器（Fig.10・PL.8）

17は、弥生式土器。逆「L」字形口縁の甕で口縁下部に断面三角形の凸帯がめぐる、内外面ともにナデ。18は円筒形の土器。平底で、体部は深くやや開きながら直立し、口縁が小さく外反する。内面ナデ、外面は磨きに近い丁寧なナデ。

SK-713出土土器（Fig.10、11）

19～22は、弥生式土器。19は鉢。平底の小さな底部にやや内湾しながら開く体部をもち、口縁は外側にやや肥厚する。内外面ともに細かいハケ目。20は丸底壺の口縁。直線的でやや開く口縁で内外面ともにハケ目。21は鉢。口縁は内湾しながらほぼ直立する。口縁端部は斜めに面取りされている。内外面ともにハケ目。22は、逆「L」字形口縁の甕。厚い口縁がほぼ水平に張り出す。内面ナデ、外面にハケ目を残す。

SK-716出土土器（Fig.11）

23は、弥生式土器で、逆「L」字形口縁の甕。口縁は断面三角形を呈し張り出す。内面ナデ、外面ハケ目。

SH-717出土土器（Fig.11～13・PL.8～10）

24～44は、弥生式土器。24、25は碗。24はやや上底気味の底部に内湾しながら立ち上がり口縁に至る体部をもつ。内面ハケ目、外面はハケ目の後ナデ。25はやや小ぶりで厚手の碗で、手捏ね成形かと思われる。内面ナデ、外面ハケ目。26～28は壺。26、27は朝顔状に外反しながら開く頸部に内湾しながら内傾する口縁をもつ袋状口縁の壺。26は、口縁の外への張り出しが強く、鋭い稜をもつ。口縁部は内外面ともにナデ、頸部はハケ目。27は頸部が短く、口縁内面はナデられているものの指頭圧痕と思われる窪みが連続して残る。外面ハケ目。28は壺の肩部。頸部と胴部の境界に断面三角形の凸帯が2条めぐる。内外面ともにナデ。29～40は甕。逆「L」字形口縁をもつ32を除くと、形態に個体差はあるものの頸部がくびれた「く」の字形口縁をもつ。29、31は胴部の張りが弱く、口縁が外反しながら大きく開く。29は内面ナデ、外面ハケ目。31は内外面ともにハケ目。30はやや小型の甕、張りの弱い胴部に直線的な口縁が外傾し開く。32はやや上底気味の小さい底部に胴部上位に張りをもつ胴部が立ち上がり、胴部上端外側に粘土帯を鍔状に貼り付けることによって逆「L」字形口縁を作り出している。内

面ナデ、外面ハケ目。33～35は胴部中位に最大径をもつ球形に近い胴部の甕で、短い口縁は外反しながら大きく開く。内外面ともにハケ目。36は胴部中位に最大径をもつ丸底の甕で、外反しながら開く口縁が付く。内面粗いハケ目、外面ナデ。37～39は胴部中位に最大径をもつ長胴の甕で、口縁がやや外反しながら開く。37は平底で内面ナデ、外面ハケ目。38はやや上底で内面ナデ、外面ハケ目。39は内外面ともにハケ目。40は口縁が大きく開く。内外面ともにハケ目。41、42は器台。41は器高の2/3程度の位置にくびれをもち受部が外反しながら開く。受部内面はハケ目、脚部内面には指頭による粘土のナデ付け痕を残す。外面ハケ目。42は脚部。内面上部には指頭による粘土のナデ付け痕を残し、裾部内面及び外面はハケ目。43、44は、円錐台形を呈す土製支脚。43は、上面がドーム上を呈し内部は袋状になっている。上面及びくびれ部の内部中央に直径２cm程度の不整円の孔が焼成前に穿孔されている。脚部内面には指頭による粘土のナデつけ痕を残す。外面ハケ目。裾部縁辺には器を成形した後に指先で持ち上げたような指頭の圧痕が見られる。44は、上面はほぼ平面で中央に直径2.5cm程度の不整円の孔が焼成前に穿孔されている。脚部内面は無調整、外面は粘土をひねったようならせん状のナデつけ痕が残る。

SJ-709甕棺（Fig.13）

45、46は、SJ-709の小児棺の棺体として使用された土器。いずれも逆「L」字形口縁の小型の甕で、口縁部下に断面三角形の凸帯がめぐる。胴の張りは弱く砲弾形を呈す。内面ナデ、外面ハケ目。上甕の45は、口径39.2cm、器高は遺存部で50.0cm。下甕の46は、口径38.8cm、器高は遺存部で46.6cm。

石器・鉄器（PL.11）

今回の調査で検出された石器・鉄器類は、太型蛤刃石斧１点、石包丁４点、鉄鏃１点であった。

47は、太型蛤刃石斧。遺存部長21.0cm、幅9.0cm、厚さ5.5cm、重量1,725g。断面形は楕円形を呈し、刃部先端部を欠く。玄武岩製。SH-717出土。

48～51は、いずれも両刃の外湾刃半月形の石包丁。48は、上辺に沿った位置に2.3cmの間隔で径0.4cmの孔が２ヶ所両面より穿孔されている。全長11.8cm、高さ4.9cm、厚さ0.7cm。泥岩製。SH-702出土。49は、節理に沿って剥離した一部が遺存している。上辺に沿った位置に2.5cmの間隔で径0.6cmの孔が２ヶ所両面より穿孔されており、仮にこの孔が全長の中央にあるとすれば、半円形に近い形態を呈すものと推定される。推定長10.5cm程度、高さ3.8cm、遺存部で厚さ0.4cm。泥岩製かと思われる。SH-703出土。50は、上辺に沿った位置に1.5cmの間隔で径0.3cmの孔が２ヶ所両面より穿孔されている。仮にこの孔が全長の中央にあるとすれば、推定長８cm程度、高さ4.9cm、厚さ0.7cmの半円形に近い形態を呈すものと推定される。泥岩製。SH-717出土。51は、全体の1/2弱が遺存している。遺存部に径0.6cm程度の両面より穿孔された孔の一部が残る。遺存部長9.2cm、高さ6.4cm、厚さ0.4cm。泥岩製。SK-718出土。

52は、柳葉形無茎の鉄族で、断面形は扁平な菱形を呈す。全長5.3cm、幅1.7cm、厚さ0.6cm、重量9.8g。SH-703出土。

Tab. 4　船石南遺跡７区　出土石器・鉄器一覧表

遺物No.	器　種	出土遺構	法　量 (cm・g)				材　質	備　考
			長　さ	高さ・幅	厚　さ	重　量		
47	太型蛤刃石斧	SH-717	※21.0	9.0	5.5	1,725	玄武岩製	
48	石包丁	SH-702	11.8	4.9	0.7	71.0	泥岩製	
49	石包丁	SH-703	※6.7	3.8	※0.4	11.7	泥岩製？	
50	石包丁	SH-717	※4.9	※4.9	0.6	18.7	泥岩製	
51	石包丁	SK-718	※9.2	6.4	0.4	45.8	泥岩製	
52	鉄鏃	SH-703	5.3	1.7	0.6	9.8		

4．まとめ

今回の船石南遺跡７区の発掘調査は、延長約67m、幅約３m、調査面積200m²という制約の中での調査であった。しかし、今回の船石南遺跡７区の調査で検出された遺構は、弥生時代中期前半から後期に及ぶ竪穴式住居址９軒、土壙７基、甕棺墓４基、その他ピットなどと調査前の予想にたがわないものであった。

また、前述のとおり、今回の調査区が昭和60年度の農業基盤整備事業に伴い船石南遺跡１区として発掘調査を実施した調査区の北辺に隣接していることから、昭和60年当時調査区北側境界付近で検出され一部しか調査できなかった住居址６軒について、今回連続する部分が検出され、住居全体の形態や規模を明らかにすることができたことも今回の調査の成果といえる。

甕棺墓は、４基が検出されたが、調査区北壁沿いで棺体の一部が検出されたSJ-708、SJ-711については、工事の影響が棺体に及ばないことが確認できたことを受け、埋め戻し保存した。

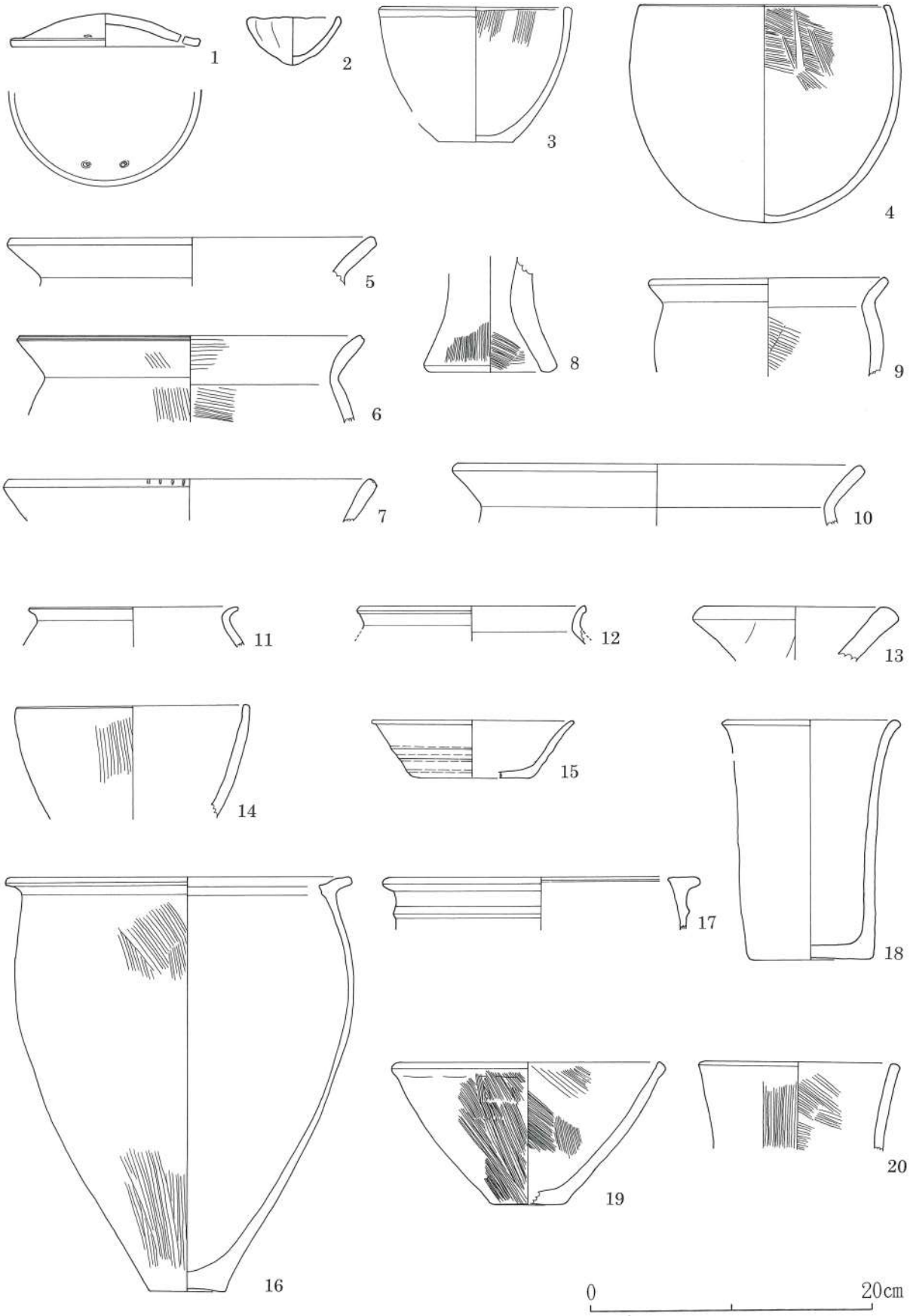


Fig.10　出土遺物実測図（1）（1/4）

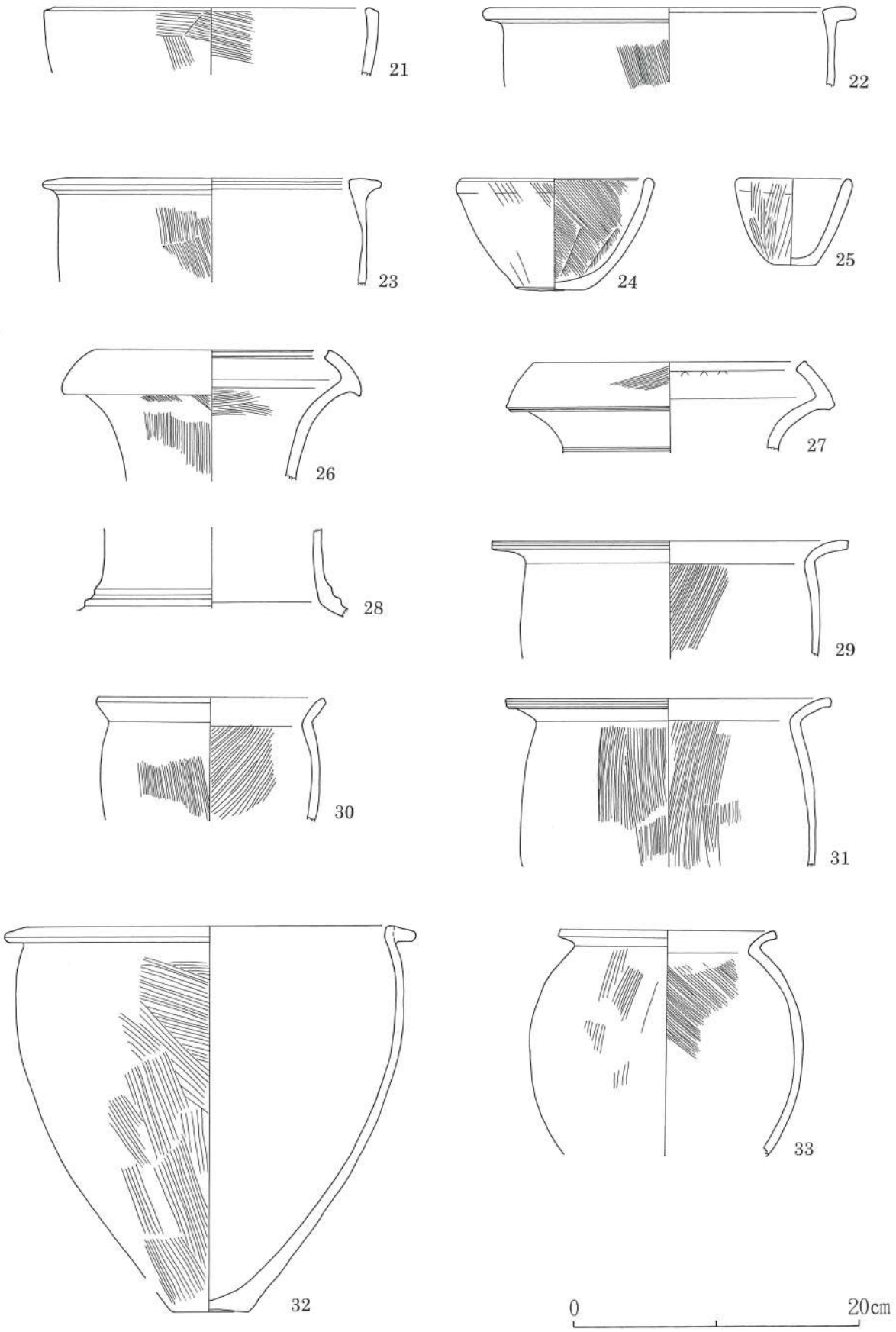


Fig.11　出土遺物実測図（2）（1/4）

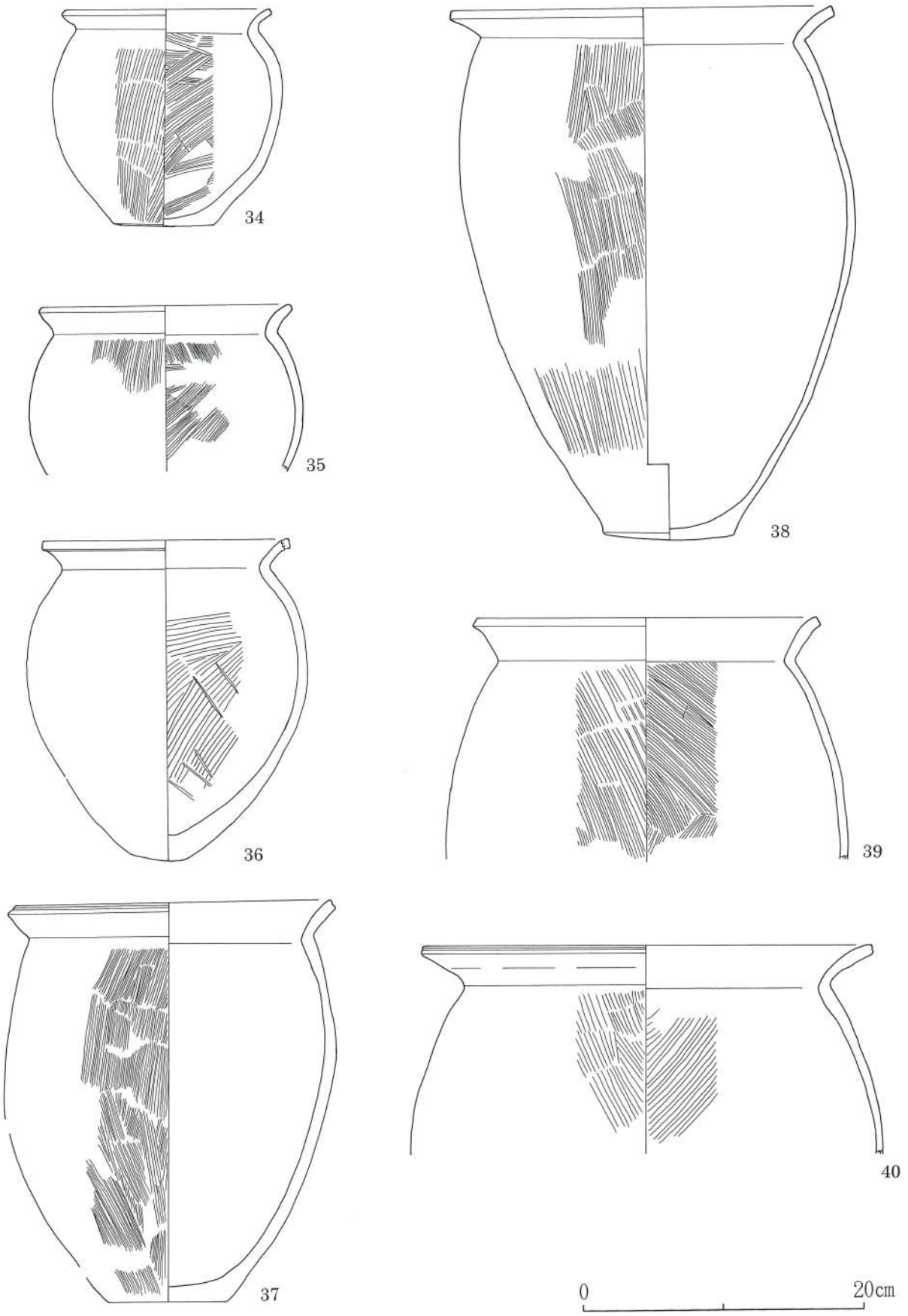
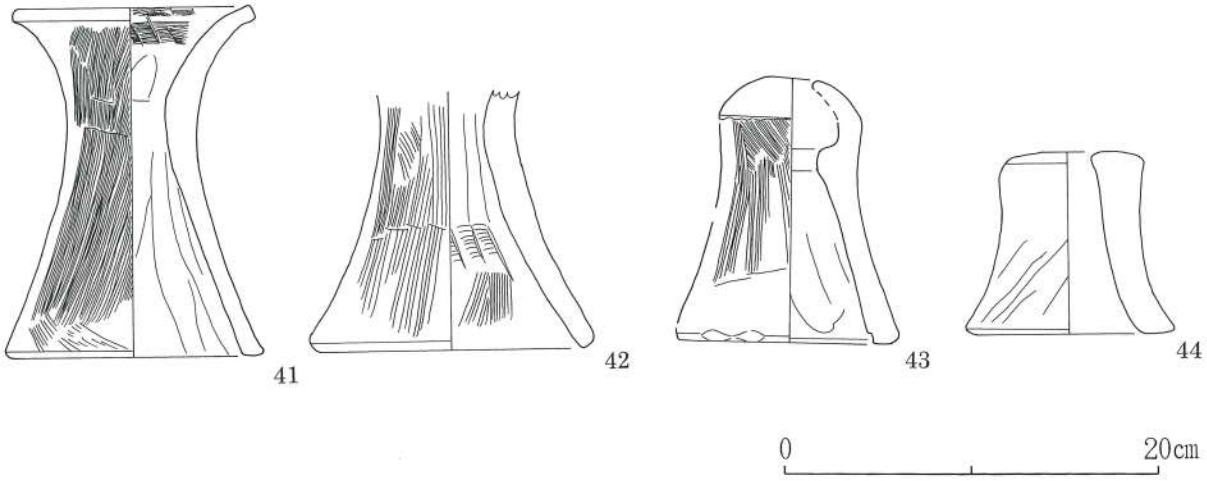


Fig.12　出土遺物実測図（3）（1/4）



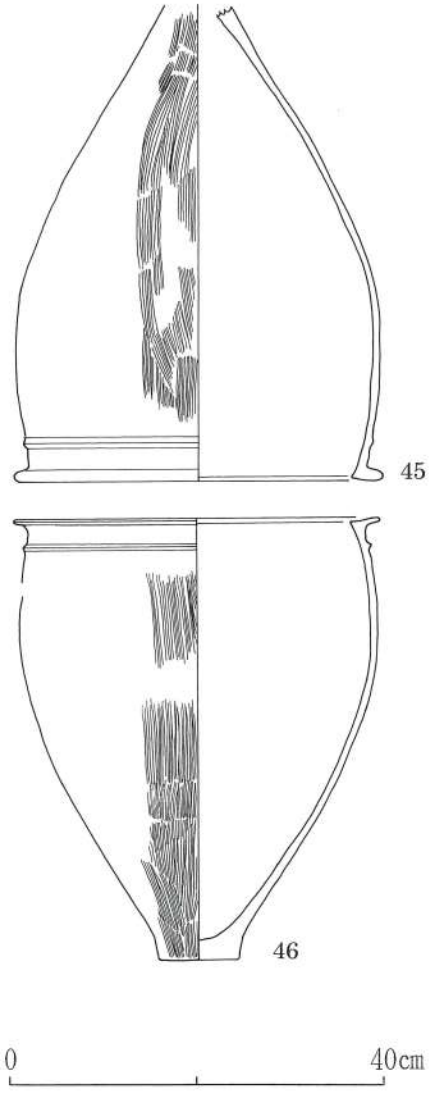
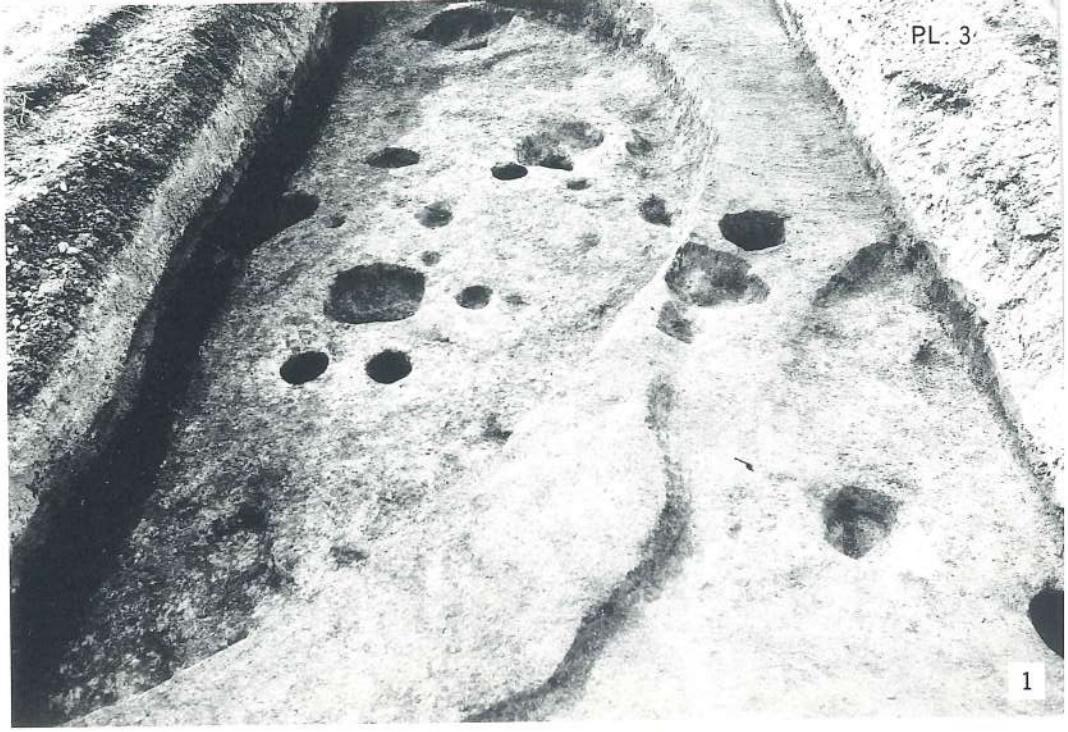


Fig.13　出土遺物実測図（4）（41～44　1/4・45、46　1/8）

図　　版

船石南遺跡７区　０mp～30mp付近　－西より－

船石南遺跡７区　30mp～50mp付近　－西より－



1　SH-701　－東より－

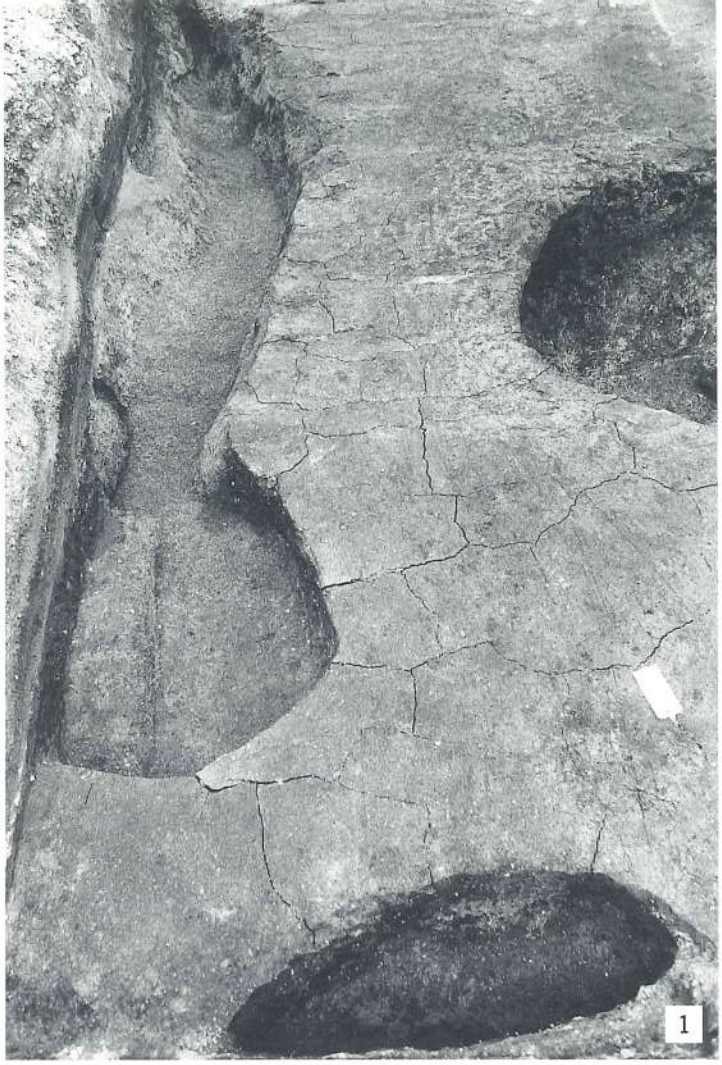
2　SH-702　－東より－

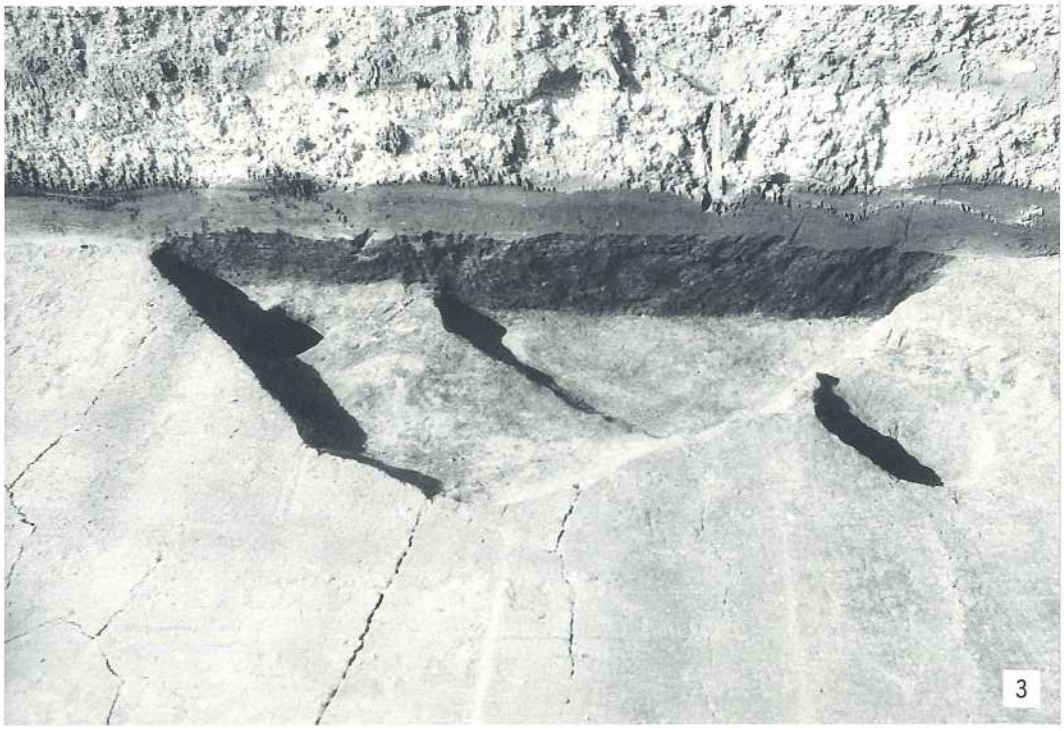
3　SH-703　－東より－

1　SH-704　－西より－

2　SH-717　－東より－

3　SH-720　－南より－





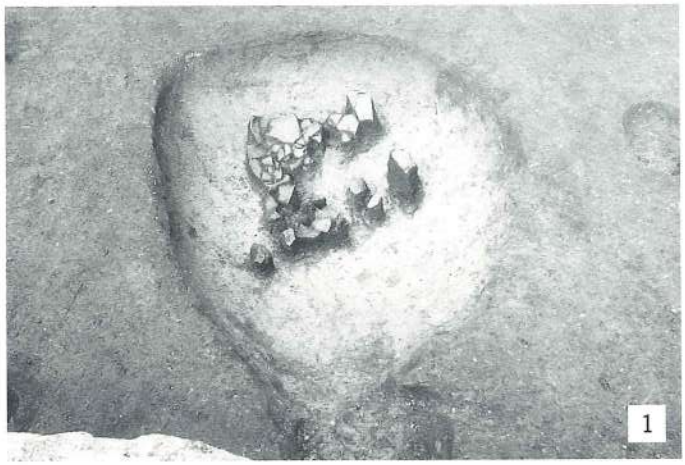
1　SH-721/SJ-576　－東より－　　2　SH-722　－東より－

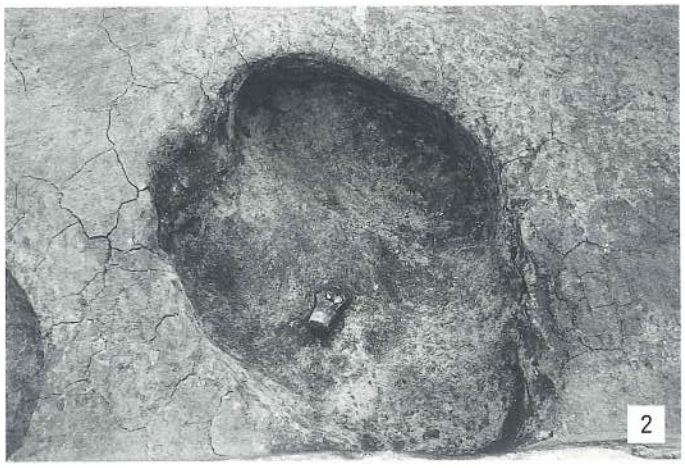
3　SH-723　－南より－

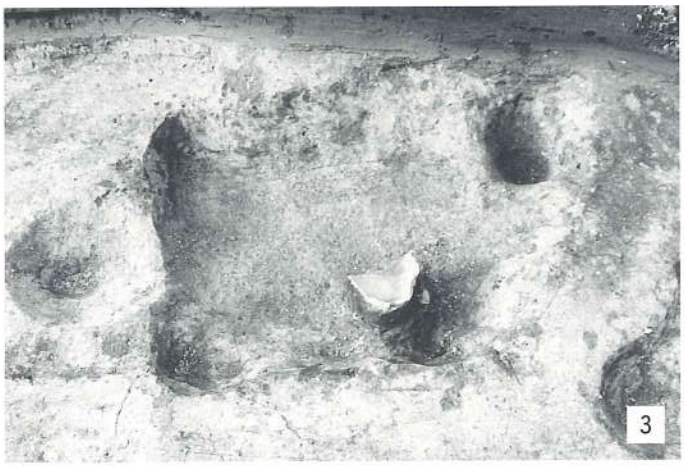
1　甕棺墓集中部分　0 mp～5 mp付近　－東より－

2　SJ-708　－南より－　　4　SJ-710　－北より－

3　SJ-709　－北より－　　5　SJ-711　－南より－







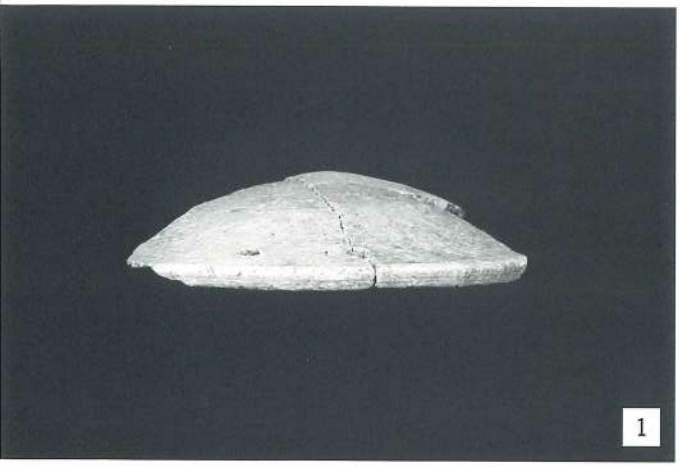
1　SK707　－南より－

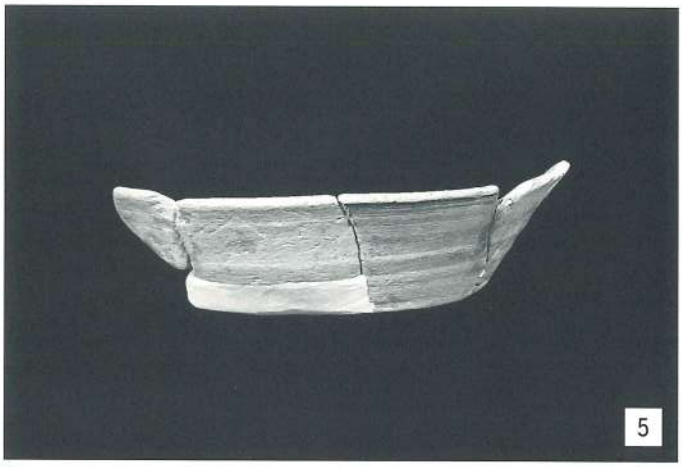
2　SK712　－北より－

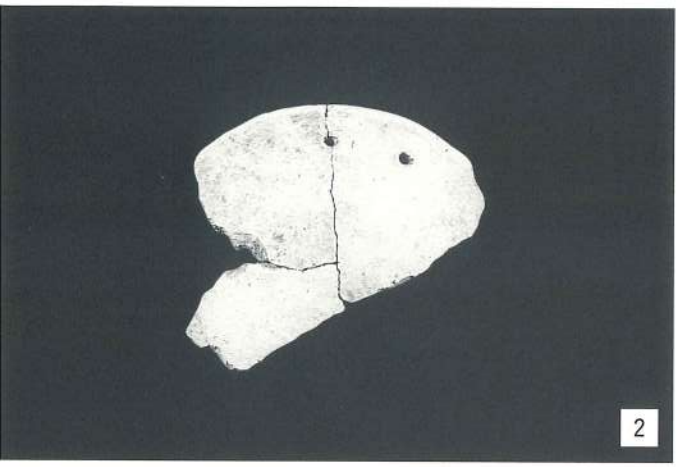
3　SK713　－南より－

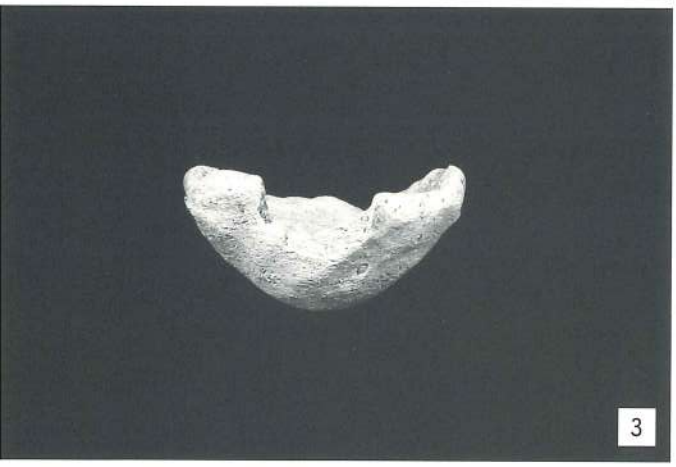
4　SK716　－北より－

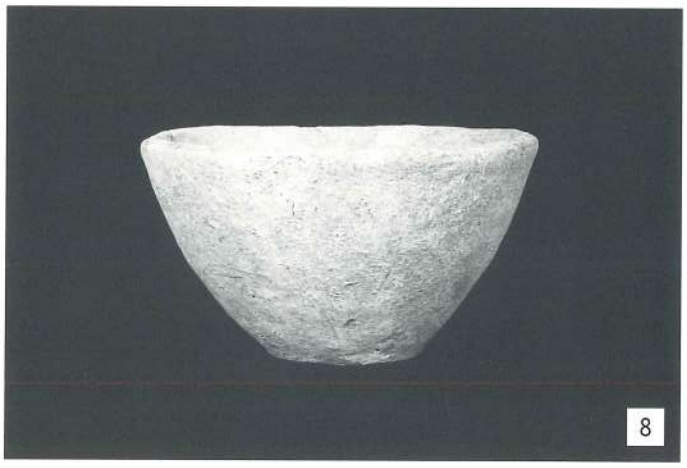
5　SK719　－南より－



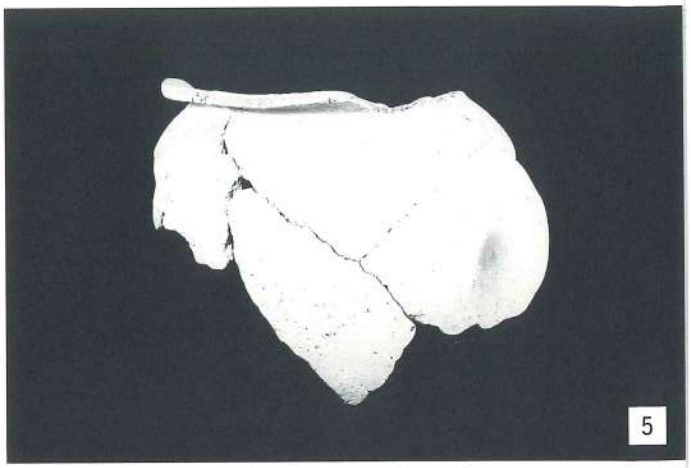


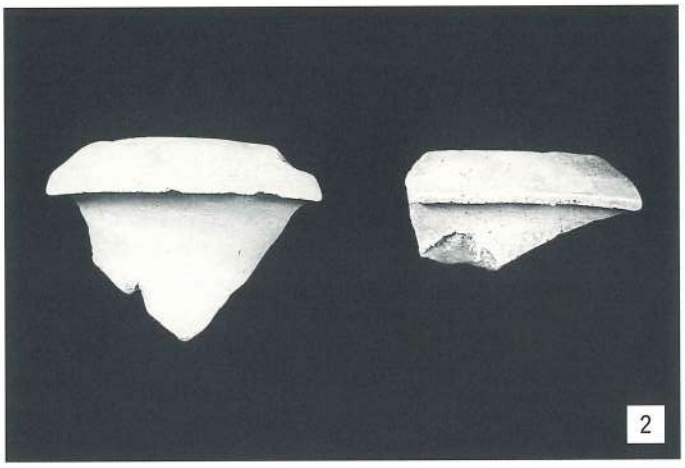


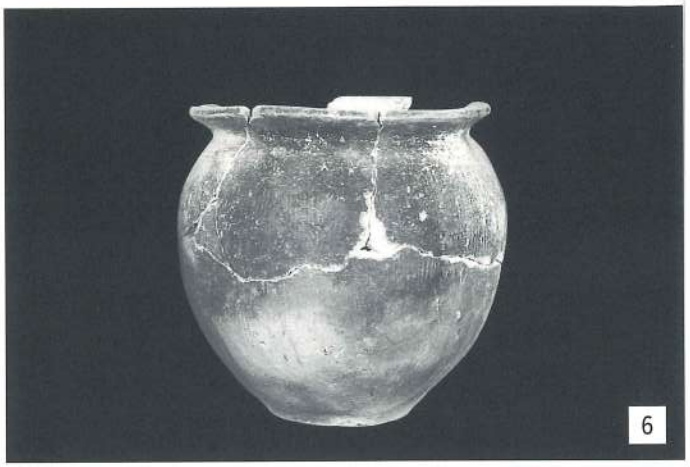


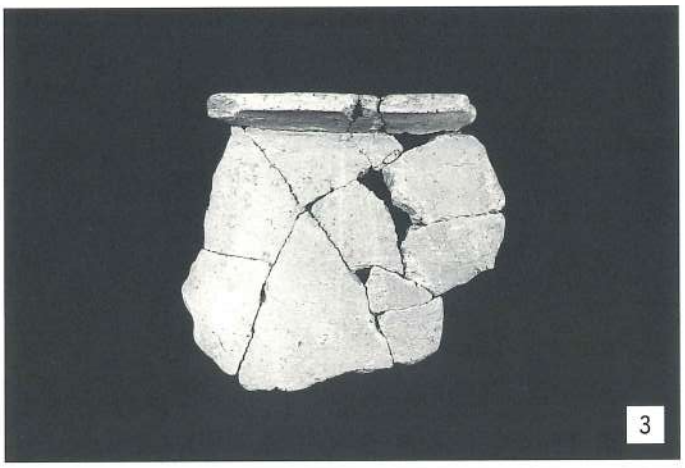


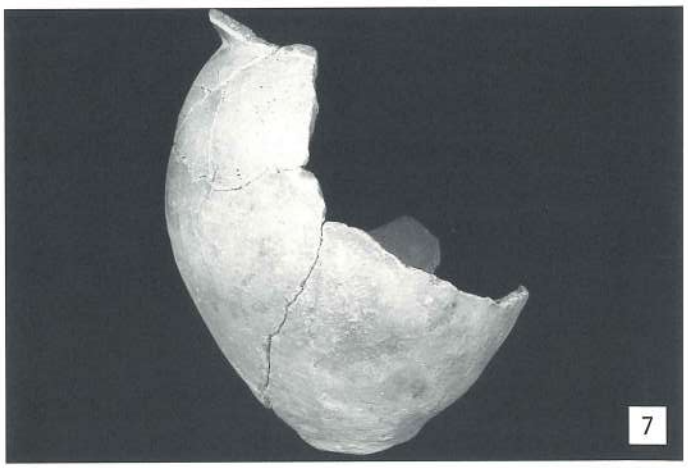
1	1	SH-701出土	5	15	SH-704出土
2	1	SH-701出土	6	16	SH-707出土
3	2	SH-702出土	7	18	SK-712出土
4	3	SH-702出土	8	24	SH-717出土



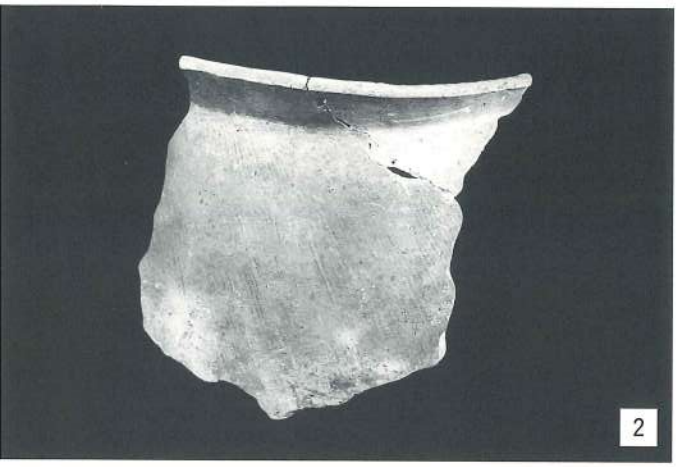


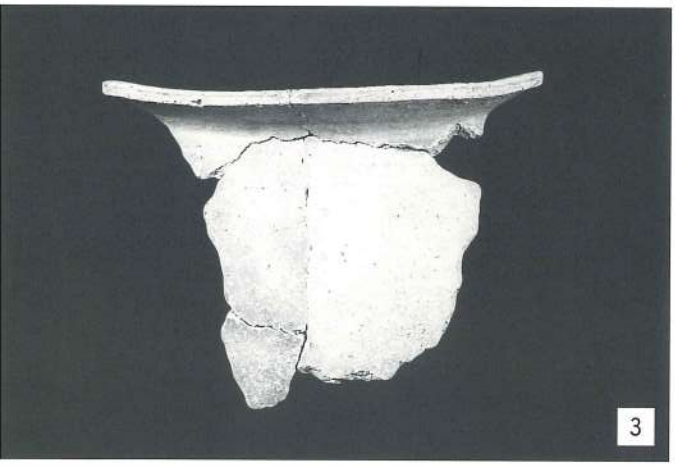


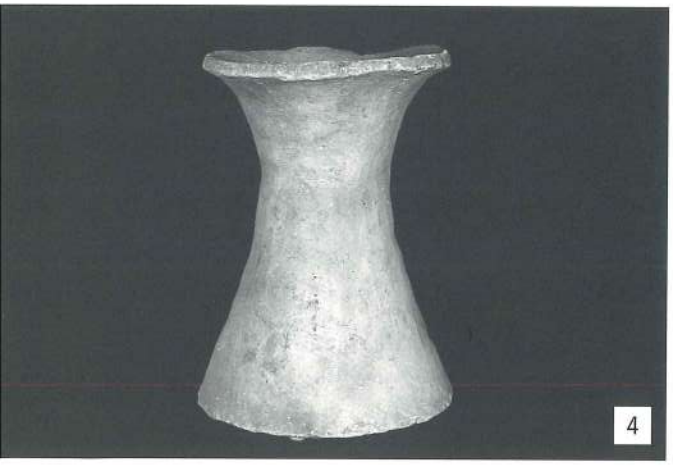




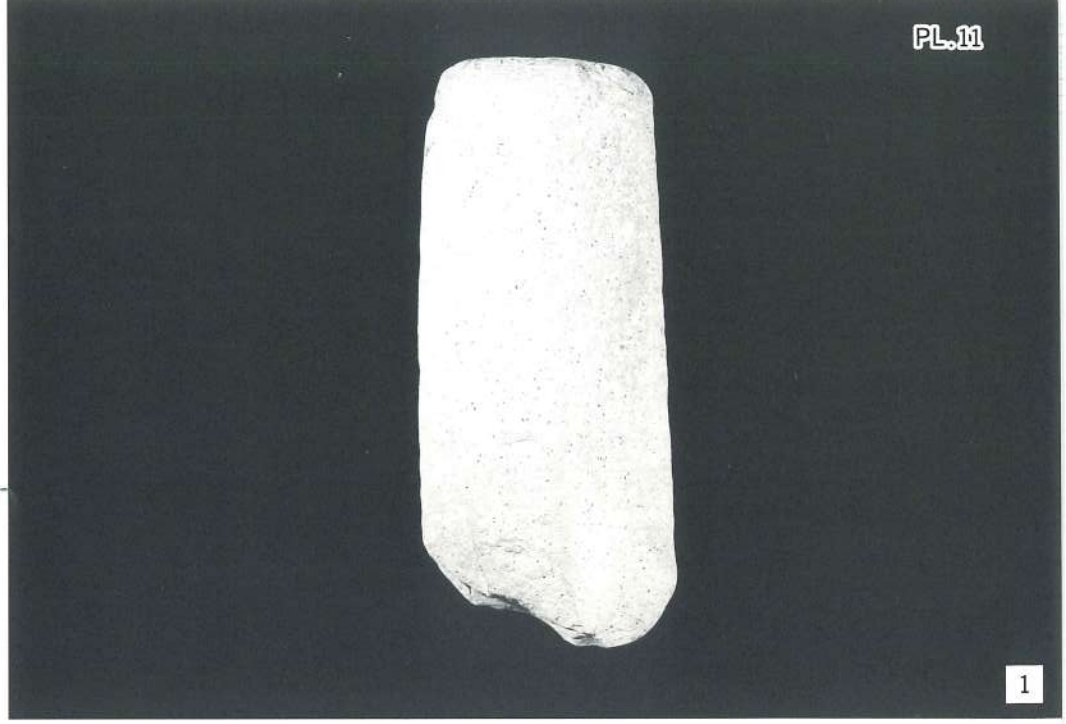
1	25	SH-717出土	5	33	SH-717出土
2	26・27	SH-717出土	6	34	SH-717出土
3	31	SH-717出土	7	36	SK-717出土
4	32	SH-717出土	8	37	SH-717出土



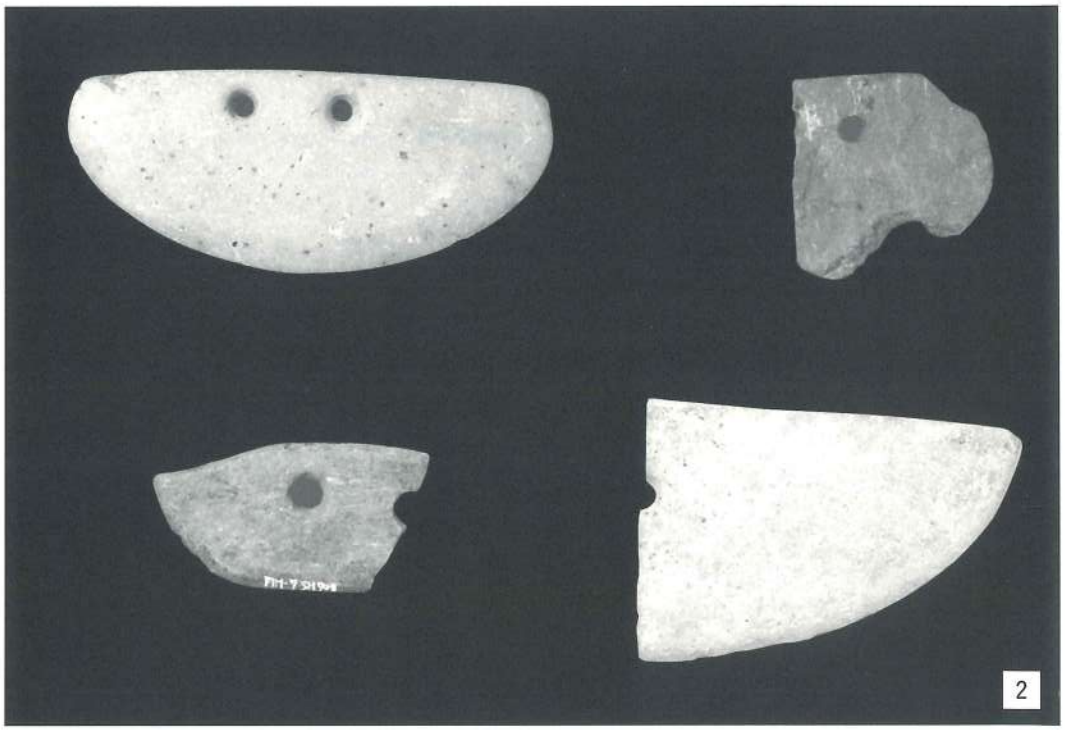




1　38　SH-717出土
2　39　SH-717出土
3　40　SH-717出土
4　41　SH-717出土
5　43　SH-717出土
6　44　SH-717出土



1



2

3

1　47

2　48・50

　　49・51

3　52

報 告 書 抄 録

ふりがな	ふないしみなみいせきⅢ
書名	船石南遺跡Ⅲ
副書名	平成11年度佐賀県営かんがい排水事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	上峰町文化財調査報告書
シリーズ番号	第23集
編著者名	原田　大介
編集機関	上峰町教育委員会
所在地	〒849-0123　佐賀県三養基郡上峰町坊所319-4　上峰町民センター内　Tel/Fax 0952-52-3833
発行年月日	2003年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
船石南遺跡 ふないしみなみいせき	佐賀県三養基郡 さがけんみやきぐん 上峰町大字堤字 かみみねちょうおおあざつつみあざ 一本谷 いっぽんだに	41345	2010	33°20′11″	130°25′46″	2001. 1.26 ～ 2001. 2. 4	200m²	県営かんがい排水事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
船石南遺跡	集落・墳墓跡	弥生時代	竪穴式住居址　9軒 甕棺墓　4基 土壙　7基	弥生式土器（中期～後期） 石包丁 土師器・坏	

上峰町文化財調査報告書第23集

船石南遺跡Ⅲ

平成15年３月20日 印　刷
平成15年３月31日 発　行

編　集
発　行　上峰町教育委員会
佐賀県三養基郡上峰町坊所319-4
☎0952-52-3833

印　刷　大同印刷株式会社
佐賀県佐賀市久保泉町上和泉1848-20
☎0952-71-8520㈹